

明治十年西南ノ戦役土佐拳兵

計画ノ真相

目次

- 第一 征韓論ノ勃発
- 第二 西郷・副島二氏遣韓大使ヲ争フ
附タリ陸奥・中島・大江・岩村外数氏木戸氏ヲ擁シ征韓論ノ反对
- 第三 木戸・大久保二氏ノ征韓反对並ニ内閣ノ瓦解暨ヒ当時ノ情况
- 第四 林氏大坂城奪略ノ雄図並ニ西郷氏訪問、全氏ノ驕矜
附タリ林氏・江藤氏ト会见及ヒ副島氏危地ヲ避ク且ツ各種ノ言説
- 第五 西郷氏兵ヲ誤ル
- 第六 近衛兵ノ瓦解ト征韓兵ノ部隊並ニ西郷・板垣二氏ノ戦略
- 第七 土佐拳兵ノ真相ト機密ニ参画者ノ氏名
- 第八 土佐出軍ノ方向并ニ古勤王派トノ聯絡及ヒ政府要路ノ頭官暗殺ノ謀略
附タリ後藤・林二氏木戸参議ニ対シ征討軍ノ懲源ト木戸氏ノ陳謝
- 第九 土佐兵出軍ノ時機ト高知城下ノ危機一髮
附タリ小池県令時難ニ斃ル、覚悟
- 第十 西郷氏天下ノ大機ヲ失ス
附タリ非征韓ノ為メ国損巨大並ニ岩倉卿非征韓ノ悔悟
- 第十一 刺客ノ抽籤
- 第十二 立志社ノ建白
- 第十三 投獄ヲ免レタル人士ト板垣氏拘引ノ覚悟
附タリ林・大江二氏ニ対シ在獄中政府特殊ノ取扱並ニ林氏岩崎彌太郎氏ト政治上大活躍ノ盟約及ヒ黒田首相カ林氏ニ密語ノ事情
- 第十四 中岡・大三輪両氏ノ任俠
- 第十五 弘瀬氏ノ雪冤
- 第十六 谷將軍帰省ノ上旧友ヘ対シ復職就官ノ勸説
- 第十七 岩倉右府暗撃ノ一素因
- 第十八 島津久光公ノ建言ニ基キ西郷氏北海道ヘ隱退ノ

希望ニ対シ板垣氏ノ激励抑止並ニ二氏三提掣ノ
終始ト板垣氏カ英主山内老侯ノ為メ屠腹ヲ免レ
タル事情

第十九政府征臺策ノ不成功並ニ西郷氏ノ炯眼

第二十板垣氏カ自由党ヲ伊藤氏ニ譲リタル主眼

外ニ

一護郷兵編成ノ趣意書

二立志社ノ建白書

三林氏・黒田内閣ニ提出ノ建言書

例言

以上

一土佐拳兵ノ真相ニ繋ハル記事タル、当年ノ事実順序並
ニ出軍ノ部署・策戦ノ計画暨ヒ機密ニ参与シタル人士
ノ氏名等ヲ記スレハ事足ルヘキモ、左スルトキハ誠ニ
簡單ニ過キサルモノト為リ、興味モ鮮ナク、亦タ這ノ
真相ニ対シ記載シタル談片^(意)ノ挿入タル、或ハ蛇足贅
言ノ誹リヲ受クル程難測ト思考シタルモ、斯談片ノ
事タル実ニ当年ノ真相ニ対シテハ頗ル切要ノモノト感
セシガ為メ、其煩ヲ厭ハス記憶伝聞ノ細大ヲ録シ編述
シタル所以ナリ、読者諒之焉、

二本書ノ事件ニ関シ、現時生存セル者寔トニ僅少ニ至リ

シト雖トモ、其特ニ機密ニテ、繋ノ甚大ナル林・大江両
氏ノ幸ニ現存シアルカ為メ一閱ヲ経サルヘカラサルモ、
生憎昨年ノ□月ヨリ数月間林氏ノ大患ニ罹リタルヨリ、
数月間全氏ハ之ヲ閲読スル事克ハサルヨリ姑ラク其輕
快ヲ俟チ、近時漸ク本書ノ草案ヲ郵送セシニ、氏ハ大
ニ這脱稿ヲ喜ヒ直ニ閲覽シ、其補訂ノケ所ヘ之ヲ付箋
シ来レリ、又大江氏ハ当年ノ記憶洵ニ詳密ナルヨリテ、
其証左ニ就キ補正ノ廉ト新タニ参考ニ供シ呉レタル事
柄モ多大ナリトス、爰ニ両氏ノ好意ヲ深謝スルナリ、
三本書ノ編述ニ対シ予カ拙文ヲ訂正シ、辞句ヲ補修シタ
ルハ実ニ愛澤寧堅翁ヲ煩ハシタル所特ニ多シトス、爰
ニ亦タ其勞ヲ謝スルナリ、

序言

一大正八年七月十六日佐命ノ元勳板垣伯爵薨去セラレ、
親族故旧及ヒ多年恩顧ヲ受ケタル者並ニ居常老伯ヲ慕
慕スル人々弔喪又ハ通夜スルニ方リ、伯爵生前ノ偉勲
逸話ニ涉ルヤ、彼ノ明治十年西南ノ戦役ニ際シ、土佐
ノ方向ニ就キ天下ノ疑問タルモノアリ、這ハ当年ノ真
相ヲ詳ニセサルヨリ世ノ惑ヲ釈ク能ハサルモ、亦タ怪
ムニ足ラス、然ルニ老伯ノ薨去セラレタル以上ハ、寧

ロ当年ノ真相事ヲ明瞭ニスルニ如カサルナリト、林・大江両氏ノ発言ニ依リ、当時ノ真相ヲ記スル事ト為シタルモ、十年ノ役後今日ニ迄ル、已ニ四十五年ヲ經過シ、歲月ノ久シキ其事ニ干繫セシ者多クハ故人ト為リ、今日其事ニ参預シタル者ニテ目下在京スル者ハ殆ント予耆人ノ外無シ、亦大林・大江ノ両氏モ夙トニ其事実ニ与カルヲ以テ、只管予ニ対シ当時ノ実況ヲ記述スル事ヲ慫慂シタルヨリ、予ハ事ノ重大ナルト且ツ後世ノ為メ杜撰孟浪ノ事ヲ記スル事ニハ為シ難ク、一時ハ頗ル躊躇シタルモ、史実ハ事実ノ通り記スルヲ当然ト思惟セルノミナラス、一旦死ヲ誓ヒ死生ノ間ニ出入シタル旧友同志者ノ為メ之ヲ事實談ト為シ、当時ノ実歴ノミヲ真実ニ略叙スル事ニ止メタル而已矣、蓋シ老伯ノ遺骸埋葬ノ後、速カニ記述セント欲シタルモ、塵事匆忙ニ涉リ之ニ從フ暇ナカリシモ、頃日閑隙ヲ得テ之ヲ記述シタリ、乍去当年ノ真相ヲシテ充分ニ叙述シ遺漏ナカラシメント欲セハ、仍ホ多少ノ時日ヲ要スルモ、今日ノ境遇衣食ニ急ナルト且ツ拙筆ノ為メ、当時ノ事情ヲ完全ニ記シ能ハサルハ畢生ノ遺憾トスル処ナリ、而シテ征韓論ノ原因ヨリ、西郷・副島・木戸・大久保

等ノ四氏カ当時ノ外征ニ対スル抱負ノ意見ヤ、西郷・副島二氏カ遣韓大使ノ任ヲ激争シタルヲ首メ、西郷・板垣両氏カ征韓ノ戰略若クハ小御所ノ 簾前大会議ノ宣旨又ハ西郷氏北海道ノ隱退ニ関シ、板垣氏ノ激励抑止等ノ如キハ、曾テ文学士烟山專太郎氏ノ著ハセシ征韓実相ナルモノガ、寔トニ当年ノ事実ヲ詳述セラレタルモノト認メ、且ツ板垣氏カ該書ヲ評シテ正鵠ニ近キモノト云云ノ一語モアリシヨリ、爰ニ予ハ同氏ノ著書中、征韓論ノ為メ廟堂瓦解ノ事情中、土佐挙兵ノ真相ニ最モ引用ヲ要スル大関緊ト且ツ其緊切ナルモノハ主トシテ烟山氏ノ著書ヨリ之ヲ転載収録シ、殊更予ノ洪龜ナル筆ヲ以テ之ヲ記述スル事ヲ避ケタルカ為メ、却テ這ノ事實談ノ記事ヲ文飾スルヲ得タル処甚タ多シトセリ、

但シ烟山氏カ著述ノ際ハ、予ハ全氏ノ来訪ヲ受ケ、当年ノ事情ヲ語リタルヨリ、参考上多少ノ裨補アリシ乎、該書出版ノ後、氏ハ其著書ヲ携へ来リ且ツ前日ノ談話ヲ謝シタル事アリタルナリ、

大正九年一月

明治十年西南ノ戰役土佐拳兵計画ノ真相並ニ拾遺

第一 征韓論ノ勃発

一 維新ノ大業成リ未タ幾ハクナラスシテ廢藩置県ノ大英断ヲ行フ、於是乎、朝鮮ノ事之ヲ對州侯ニ委ヌル幕府ノ旧ニ於ケル如クナル能ハス、外務卿命ヲ奉シ好ミヲ通スルモ不敬ノ言辞ヲ弄シテ其国民ニ布告シ、我國威ヲ害スルモノ多シ、是以テ廟堂ノ諸公ハ不問ニ附スヘカラスト為シタリ、而シテ副島外務卿ノ意見ニ曰ク、我國ノ現在及ヒ將來ニ於テ最モ戒心セサルヘカラサルモノハ、露國ノ南侵ニ在リトス、然レトモ目今清國ノ力微弱ニシテ其衝ニ当ルニ堪ヘサレハ、其任ハ一ニ我國ノ負フ所ナラサルヘカラス、故ニ我國ハ須ラク北方ニ於テ朝鮮ヲ保護ノ下ニ置キ、露國ノ侵略ヲ防キ、南方ニ於テハ臺灣ヲ略有スルヲ策スヘシ、蓋シ臺灣ハ清國ノ力之ヲ統治スルノ実力ナシ、去リ逆テ之ヲ放棄スレハ忽チ外人ノ占ムル処ト為リ、台地ニシテ一旦外人ノ手ニ歸セン乎、是レ直チニ彼等ノ勢力ヲシテ更ニ清國內地ヲ侵蝕シ、我國ノ位置甚タ危険ナリト云フヘシ、是以テ必ス臺灣ヲ我カ勢力範圍ニ置キ、一方ニ於テハ朝鮮ヲ我カ権力ノ下ニ置キ、半月形ヲ描キテ清國ヲ包

擁シ將ツテ覇ヲ東洋ニ制シ、露國ノ内侵ヲ防衛スルニ如クハ莫シト、議當時ニ行ハレスト雖トモ後二十二年ニシテ臺灣ヲ領有シ、三十四年ヲ終テ朝鮮宗主ノ權ヲ把リ、今ハ乃チ併合シテ全ク我版圖ニ歸スルモノ、正ニ是レ其大策ヲ實現スルニ外ナラス、卓識創見豈歎眼セサラン哉、

第二 西郷・副島ニ氏遣韓大使ヲ争フ

附タリ 陸奥・中島・大江・岩村氏等外數氏木戸氏ヲ擁シ征韓論ノ反対

一 朝鮮ニ対スル副島氏ノ意見提出スルヤ、西郷・板垣二氏ノ所見モ亦タ之ニ符契シタルヨリ大ニ之ヲ贊成シ、遣韓使ノ任ハ西郷氏自ラ之ニ当ラント欲シ、且其理由ヲ敷演シテ曰ク、凡ソ外交ノ難事ハ概ネ文武両職ヲ兼ねタルモノ之ニ当ルヘシ、而シテ隆盛之シキヲ陸軍大將ニ稟ケテ參議ヲ兼ヌ、安ソソ之ヲ他人ニ委スヘケンヤト(西郷氏ハ五年七月十二日陸軍元帥兼近衛都督ト為リ、翌六年五月十日新タニ陸軍大將ニ任シ、參議ヲ兼ネタリ、)飽迄自分ニ於テ其任務ニ斃レン事ヲ熱望ス、副島氏亦タ自己ノ外務卿タルヲ以テ当然之ニ当ルヘキヲ主張シテ論争決セス、西郷氏ハ一夜副島氏ヲ訪ヒ、遣韓大使ノ義ハ一切己レニ讓步セン事ヲ懇請セシニ、副島氏私見ヲ固持シ

テ国家ノ大事ヲ遲疑スルヲ屑トセサルモ亦タ西郷氏當時ノ境遇ヲ諒察シ枉ケテ其主張ヲ撤回シタリト云フ、当初對韓論ノ起ルヤ、板垣氏ハ英佛二国カ居留民保護ノ為メニ横濱ニ派兵シアル例ニ倣ヒ、我國ヨリモ一大隊ノ兵ヲ釜山ニ出タシ、我居留民ヲ保護シ、然后修交條約ノ談判ニ及フヘシトノ強硬論ヲ提議セシモ、西郷氏カ身ヲ犠牲ニ供シ、自ら遣韓大使ノ任ニ当ラント欲スルノ意見ニ同意シ、之ヲ撤回シタリト云フ、而シテ一旦西郷氏ノ遣韓大使タルノ廟議決定セントスルニ方リ、或ル一人ノ閣員ヨリ斯ル重大ノ事件ハ岩倉大使ノ一行ノ帰朝ヲ俟テ決スルモ晩カラサルヘシト提議スルヤ、西郷氏ハ大喝シテ曰ク、堂々タル一国ノ政府カ国家大事ヲ決スル能ハスト為サハ、一切ノ簿書ヲ高閣ニ束ネ手ヲ拱シテ大使ノ帰朝ヲ待ツニ如カスヤ、トノ激論抗議ニ畏怖シテ遂ニ沈黙シ、廟議ハ直ニ西郷氏ノ大使任命ノ事ニ決シタルナリ、但シ其発軛ハ岩倉卿等ノ帰朝ヲ待ツト云フ事ニ確定シ、三條首相ヨリ上奏シテ以テ御裁可ヲ賜ハリタリト云、

是レヨリ先キ、木戸氏ハ岩倉大使ニ先タチ帰朝シアリシヨリ、當時ノ征韓論ニ反対セシ陸奥宗光・中島

信行・大江卓・岩村高俊・中村進一郎・岡内重俊・提正誼等ノ諸氏ハ、武人ノ勢力弥々跋扈シ、将来益々強大ニ臻ランコトヲ怖レ、之ヲ排斥スルニハ權勢アル木戸氏ヲ抱擁シ、之ヲ阻止セシメント欲シ日夜奔走ノ結果、木戸氏モ丕ニ贊成シ、岩倉右府ノ帰朝ヲ待チテ之ヲ主張セント期シタリキ、(或ハ言フ、陸奥・大江ノ二氏ハ隱然苦肉ノ計ヲ画シ、陸奥氏カ竊カニ三條公ニ説ク所アリテ、急ニ岩倉大使ノ一行ニ召還ノ電命ヲ発セシメタリト云フ、)而ルニ大江氏ハ予ニ對シ往年非征韓ヲ率唱シタルハ所謂儒生ノ議論タリシ事ヲ悟リ、之ヲ悔ヒタリト明言シタリ、

第三 木戸・大久保二氏ノ意見並ニ内閣ノ瓦解及ヒ大久保氏カ西郷氏ノ帰臥ヲ刺違ヲ為シテモ抑止セントシタル決心

一副島氏已ニ讓歩シ、大使ハ西郷氏ニ帰シタルモ、當時岩倉・大久保等ノ諸卿欧米漫遊ノ途ニ在ルヲ以テ、主題ノ確定即チ大使發軛ノ件ハ帰朝後ニ保留シアレハ、帰朝勿々廟議ヲ開キシニ、料ラサリキ木戸・大久保二氏大ニ不可ヲ唱ヘ、岩倉卿亦タ之ニ和ス、今木戸氏反對ノ要旨ヲ略述スルニ、我國古來東海ニ蟠居シ、宇内

列国ト交通セサルモノ數百年人智未タ進マス、富強未
タ全カラス、独立ノ名アリテ独立ノ実ナク、故ニ欧米諸
邦ニ接スル毎ニ其抵角セサルヲ以テ憾ミト爲ス、今国
家ノ経営スヘキモノ多端ニシテ、而シテ資料ノ給スヘ
キ無ク、細トナク小トナク悉ク之ヲ外国ニ仰キ、糜帑將
ニ傾カントシテ而シテ需用未タ充ス能ハス、重債外ニ
償フナク賦調内ニ加フルノ余地モ無ク、方今ノ務メ唯
当サニ節儉ヲ主トシテ財力ヲ養フヨリ急ナルハ莫シ、
況ンヤ一度兵ヲ動カス、行軍ノ用其費^(實)ラレス、勝ツ
モ善後ノ策ナク、勝サルモ持久ノ方ナシ、其弊勝テ計
フヘカラス矣、是以臺灣未タ向フヘカラス、朝鮮未タ
征スヘカラスト云フニ在リ、又大久保氏ノ意見タル、
凡ソ国家ヲ経営スル慮ヲ深フセサルヘカラス、征韓ノ
事ノ如キ輕拳スヘカラルモノ其要七アリ、請フ其目ヲ
挙ケテ之ヲ論セン、新政以來百度悉ク改廢シテ士民業
ヲ失フ者多シ、或ハ増税ニ疑フ致シ動モスレハ轍チ血
ヲ蹀ムニ至ル、今若シ外ト罅隙ヲ生スルアラハ能ク其
變動ナキヲ保スヘカラス、是レ其一ナリ、(以下大綱論第二
局ニ直触スル
モノヲ掲ク)諸官府事ヲ興シ富強ヲ謀ルモ其効悉ク数年
ノ後ヲ俟ツ、今ヤ卒然兵役ヲ起サハ百事中止シ前効咸

ナ廢スルニ至ラン、是レ其三ナリ、外寇ノ憂フヘキハ露
國ノ南進ニアルハ世ノ均シク知ル処、今我レ朝鮮ト兵
ヲ交ヘ鷓蚌相持セハ彼レ必ス漁夫ノ地ニ立タントスル
モノ是レ其五ナリ、又露ニ次クモノハ英トス、我レ多
ク債ヲ彼ニ負ヒ賠償スル事能ハス、彼レ必ス之ヲ口実
ト爲シ内政ニ干与シ以テ我ヲ印度ニセント欲スモノ必
無ト爲スヘカラス、是レ其六ナリ、又我各國ト条約ヲ結
フニ權対等ナラス、英佛ノ如キハ悍然護兵ヲ我地ニ置
キ殆ント属國ノ如キモノアリ、然ルニ是ヲ恥スシテ独
リ朝鮮ヲ咎ム、大ニ忍ヒ小ニ忍ハス、遠キヲ憤ヘリ近
キヲ忘ル、是レ其七ナリ、且ツ其朝鮮伐ツヘシト謂フ、
利ノ爲メニスルカ義ノ爲メニスルカ、利ノ爲ニスレハ
朝鮮全国ヲ略有スルモ得失償ハス、義ノ爲メニセンカ
撃ツヘキノ名義無キヲ如何セン、論者又曰ク、先ツ使
ヲ遣ハシテ後兵ヲ興サント、嗚呼是レ何タル事ソ、今
討ツヘキ名義ナクシテ徒ラニ武ヲ驢カシ内ヲ弊ラシ外
ニ徇フト、愚未タ其解ヲ得サルナリト、甲論乙駁已マ
サルモ、岩倉卿及ヒ大久保・木戸士等ハ業已ニ御裁可
ヲ經タル對韓策ニ対シ大勢ノ動カスヘカラサルヲ知リ
タル岩倉卿、三條首相ニ説キ廟議ヲ変更セント試ミタ

レハ、首相ハ懊惱遂ニ病ヲ生シ登閣セサルヨリ、岩倉卿ハ首相ノ代理ト為リ假令ヒ

聖上遣韓大使ノ議ヲ聞シ召サルモ余ガ首相ノ假摂ト為ル上ハ断シテ之ヲ諫止シ奉ラサルヘカラスト放言シ、

江藤氏ノ我國權ノ得喪ニ関スル一大問題トシテ之ヲ追窮論難スルモ顧慮セス、既決ノ征韓論ヲ阻息セシカハ、

主戦派ノ議竟ニ敗レ、西郷氏以下諸参議蹙然冠ヲ掛ケテ而シテ去ル、是レ実ニ明治六年拾月ナリ、己ニシテ諸卿ノ憤懣休マス、西郷氏ノ如キハ御用滞在ノ命ヲ顧ミ

ス慨然帰魔ノ途ニ上ルヤ、板垣氏ハ西郷氏ノ退京ニ際シ将来ノ事ニ就キ謀ル処アラント欲シ、一夜其廬ヲ訪

ヒ先ツ民撰議院設立ノ建議ヲ提出セン事ヲ以テ賛成ヲ求メシニ、西郷氏ハ之ニ答ヘテ曰ク、足下ノ言不可ナ

ルニアラス、然レトモ左顧右眄為ス無キノ政府ニ向テ進ムルニ言論ヲ以テスルハ抑モ迂ナリ、寧ロ強力ヲ以

テ之ヲ奪ヒ然後宜シク民撰議院ヲ立ツヘキナリト、又板垣氏ハ再ヒ西郷氏ニ対シ将来ノ事ヲ謀ラントシタル

モ、前途ノ事ハ俱ニ覆車ノ戒ニ鑑ミ過チヲ復ヒスル莫カラント云ヒテ、今后ノ事ハ須ラク時ノ来ルヲ俟ツノ

外ナシト云ヒ、深く語ルヲ好サルカ如シト云フ、又板

垣氏ハ木戸氏ニ対シテモ民撰議院設立ノ須要ヲ談スレハ、木戸氏ハ新聞紙上ニ登載前ノ事ナラハ(日新實事誌ニ掲載シタリ)

大ニ考慮ヲ要スル事アルモ、業已ニ新聞紙上ノ大問題(馬城台三郎即チ大井權太郎氏ト下加藤弘之氏ノ論争ノ如キ)ト為タル今日ナラハ、今姑ラク

其趨勢ヲ觀察致度ト云ヒタル由ナリトス、

因ニ記ス、当時西郷氏ノ後輩タル黒田開拓長官ハ樺太問題ヲ、桐野熊本鎮台司令長官ハ臺灣問題ヲ提ケ、

之ヲ主張シ、之ヲ先決問題トシ、其実ハ西郷氏ノ韓

国行ヲ危ミ之ヲ阻止セント努メタルモ、西郷氏ハ大

喝之ヲ叱スルニ及ヒ、二氏幡然其態度ヲ変セント云フ、然ルニ別府晉介氏(近衛歩兵少佐)ハ独リ西郷氏ノ朝鮮ニ

至リナバ韓人ノ頑冥必ス害ヲ加フヘケレハ、同罪ノ名義此ニ於テ明カナルヲ得ントテ、渡韓遭難ノ事ヲ

從憑シタリシカハ、西郷氏ハ板垣氏ニ向ヒ、別府ノ意氣ヲ愛シ、薩人第一ノ快男兒ナリト激称シタリト云フ、

是レヨリ先キ五年ノ冬十一月、西郷・板垣ノ両参議ハ協議ノ上、首相三條公ニ請ヒ朝鮮視察員トシテ陸軍中佐北村重頼(七七)・全少佐別府晉介(人藏)両氏ニ全行セシメ、尋ヒテ薩人池上四郎・土佐人武市熊吉

(武中氏ハ后年岩倉卿ヲ暗殺セントシタル主魁ナリ)

二氏ヲ派遣セシメタリシヨリ、
這ノ四氏ハ別シテ征韓党ノ熱狂者ト為リシト云フ、
又聞ク所ニ依レハ、伊藤氏(博文氏)ノ後年哈爾濱ニテ
兇徒ノ毒刃ニ斃ル、前、汽車中某新聞記者ニ對シ談
スラク、往年征韓論ノ為メ廟堂分裂シ、西郷氏ノ郷
土ニ帰臥スル際、大久保氏ヲ訪ヒ別ヨ告ケルニ方リ
只単ニ我レハ帰虜スルゾトノ一言ヲ遺スノミ、大久
保氏亦タ君帰臥スルモ僕ノ関スル処ニアラスト雖ト
モ、今後ノ事ハ如何ニ成リ行クヘキカハ僕ノ知ル所
ニアラスト言ヒ放チ、敢テ他事ヲ談セサルヨリ、其
隣席ニ居タリシ伊藤氏ハ大久保氏ニ向ヒ、両君別離
ノ辞タル頗ル單純且ツ大久保氏ノ挨拶振リ至極冷淡
ニ涉リシヲ痛歎シ、大西郷カ帰臥セハ、今後ノ時勢
ハ如何ニ之ヲ觀察セラル、ヤ、余ノ見ル所ニテハ必
ス無事ニ終ラサルヘシ、前途実ニ國家ノ為メ憂慮ニ
勝ヘサルナリト言ヒケレハ、大久保氏沈思默慮良々
久フシテ曰ク、然リ固ニ其言ノ如シ、我レ必ス帰思
ヲ翻サシメント、卒然座ヲ起チ彼レ若シ聴カスンハ
俱ニ刺違ヘン耳ト、憂色荐リニ面ニ見ハレタリ、伊
藤氏之ヲ視テ驚キ、最モ今日ニ至リテハ脚能ク千言

万語スルモ其志ヲ翻スヘキニ非ラス、恐クハ反テ測
ラレサルノ害アラント力説シタレハ、大久保氏モ竟
ニ伊藤氏ノ説ヲ聴キ断念シタル由ナリ、然シテ伊藤
氏ノ尔カ云フ所以ハ、西郷・大久保両氏ノ再会面晤
セハ蓋シ或ハ刺殺スルニ至ラン、当年ノ形勢タル実
ニ大久保氏ノ如キ蓋世ノ偉人廟堂ニ殘留シ政軸ヲ運
転シ内務卿ノ要地ニ在ラスンハ、國政ニ變理ノ任ニ
当ル者絶ヘテ在ル莫シ、苟クモ氏ニシテ而シテ斃ル
レハ、伊藤氏自ラ其後ヲ襲カサル可ラサルモ、未タ
自己ノ貫目ノ足ラサルヲ自覺シ、氏ヲシテ危地ニ踏
込マシメス、可成丈其生存留職ヲ冀フノ余マリ、内
實這ノ面会ヲ抑止セシメタル所以ナリトテ、当年ノ
苦衷ヲ白状シタリト云ヘリ、伊藤氏ノ機敏或ハ然ラ
ント、薩人某氏ヨリ親シク伝承シタル処ナリ、

當日西郷氏ニ随行シタル書生ハ、後二子爵ニ叙セ
ラレタル高島鞆之助氏ニシテ、西郷氏カ大久保邸
ニ抵リ面接ノ際、菓子ヲ饗シタルニ西郷氏ノ口ニ
適シタルモノナルカ、其邸ヲ辞去スル節高島氏ヲ
シテ只今喰ヒ殘シタル残りノ菓子ヲ悉ク貰ヒ来レ
トノ申付ニ依リ、高島氏ハ再び席ニ立戻リ其菓子

ヲ(カステイ)紙ニ包ミ取帰レリト云奇談モアリシ由ナリ、蓋シ國家ノ大問題ニ関シ郷土ヲ全フスル而雄力其意見ヲ異ニシ、決然袂ヲ分チテ其争ヲ干戈ニ訴エントスルノ時ニ於テ、総角尔汝ノ態ヲ失ハス、喰残シタル一片ノ菓子ヲ齎ラシ帰ルカ如キ磊落タル英雄ノ心事ハ、深く感スルニ余マリアリト云フヘシ、

是レヨリ先キ岩倉卿ヲ首メ欧米視察員一行ノ横濱港ヲ解纜スルニ方リ、西郷・板垣両氏等居残りノ諸參議ハ之ヲ見送り、帰京ノ途中汽車内ニ於テ西郷氏ハ板垣氏ニ向ヒテ言ヘラク、今日出発ノ欧米行連中カ、航海中風濤ノ為乗込ノ船舶カ顛覆シテ一行皆魚腹ニ葬ラルナラハ、誠ニ愉快ナラスヤト言ヒテ哄笑シタリト云フ、英雄ノ放言復タ奇抜ナリトス、

第四 林氏大坂城奪略ノ雄図並ニ西郷氏訪問全氏ノ驕矜

附タリ林氏・江藤氏ト会見及ヒ副島氏危地ヲ避ケ且ツ各種ノ言説

一翌七年ノ春、板垣氏ハ林有造氏ヲシテ鹿兒島ニ微行セシメ、西郷氏ノ意衷ヲ叩キ、傍ハラ薩南人心ノ動靜ヲ

探ラシメタリシニ、西郷氏ハ林氏ニ面会ヲ避ケントスル傾向アリシモ、樺山資綱氏(司法省)ノ懇到ナル幹旋ニ依リ、其遠來ノ勞ト板垣氏ノ伝言ヲ無視スルハ礼節上不可ナル事ト為シ、遂ニ会見シタルモ纒カニ久濶ヲ陳フルノ外絶ヘテ一語ノ時事ニ及フ無ケレハ、林氏ハ先ツ口ヲ開キテ方今当路權臣ノ不甲斐ナキ実ニ言フニ忍ヒサルモノナリト言ヘハ、西郷氏其言ノ奇矯ヲ異トシ、夫レハ如何ナル事ゾト問フ、林氏曰ク、閣下ハ現ニ

陸軍元帥ニシテ大將且ツ近衛都督ヲ以テ御用滞在ノ命ヲモ顧慮セス無断無届ヲ以テ故山ニ帰臥セラル、モ、政府ハ何ラノ手ヲ下タス能ハス、威令ハ地ニ墜チ今日迄其儘ニ附セルカ如キハ、実ニ言フニ忍ヒサル事ニアラスヤト云ヘハ、西郷氏膝ヲ打チ曰ク、足下ハ偉人ナリ、其所ニ着眼シタルハ流石ノ林君ナリト言ヒテ頗ル激称シタリ、林氏ハ西郷氏ノ心稍々動キタルト思ヒシカハ、更ニ語ヲ進メテ曰ク、方今ノ勢ヒ一日モ猶予スヘキノ時ニアラサルヲ以テ、僕ハ土左(佐)ニテ兵ヲ挙げ直チニ大坂城ヲ奪略スヘシ、閣下ハ薩南ノ健兒ヲ率ヒテ熊本城ヲ包圍シ、其兵ヲ分チ馬關ニ突出シ以テ中国ニ押シ出テハ、四方ノ志士ハ閣下ノ麾下ニ雲集シ天下ヲ制

スル事何ノ難キ事アラン哉ト、熱誠ヲ覃メテ力説シタルモ西郷氏ハ黙シテ答ヘス、須臾ニシテ謂テ曰ク、土佐ノ諸君ハ木戸・大久保ヲ助ケテ政府ノ兵ヲ率ヒテ征虜軍ニ投スヘシトノ妄言ヲ放チシヨリ、林氏モ大ニ憤恚シ、今日ノ如キ優柔彼レカ如キノ政府ニ対シ、板垣始メ土左人^(佐)士ナル者誰モ人現政府ノ為メニ力ヲ致サント欲スル者アラン哉、殊ニ昨冬廟議ノ相容レサル柄鑿齋ナラサルモノアルニ於テヨヤ、激語數言西郷氏ヲ誅シリシカバ、氏遂ニ悟ル処アリシカ之ヲ謝シテ曰ク、足下ノ意見理ナキニアラサルモ、余ハ今日ニ至ルモ未タ土佐ト結ヒテ俱ニ兵ヲ挙クルノ意志ニ至ラサルナリ、然リト雖トモ木戸等余ヲ害セントスル禍心アツテ未タ其拳ニ及ハサルハ、畢竟土佐ヲ怖レテナリ、故ニ此際土左ハ可成局外ニ立チ、薩摩ヲ援クルノ意無キヲ視メサハ、木戸等ハ何トカ名義ヲ附シ討薩ノ軍ヲ興サン、余ハ只偏ニ之レアルヲ待ツナリトノ事ニテ、林氏ハ頗ル其感想ノ意外ナルニ驚キ、到底土佐・薩摩ノ結合ノ不可能ヲ覚悟シ、断然去ツテ、佐賀ニ向ヒ江藤氏ヲ訪ヒタルナリ、
(林氏ノ西郷氏ト会見ノ席上ニハ同野・藤原・村田並ニ榊山氏ノ隨黨ハ其席ニ陪セリト云フ)、林氏ノ鹿兒島ヲ去ルニ臨ミ、県令大山綱良氏ハ一夜旗亭ニ

招待シ、厚ク款待シタリト云フ、抑モ江藤氏カ林氏ト再会ヲ希望スルヤ切ナリ、是故ニ氏ノ佐賀ニ抵ルヤ踊躍遠來ノ勞ヲ謝シ謂テ曰ク、(征韓論ノ破裂后、林氏ハ江藤氏ト神戸ニ邂逅シ、全港ヨリ全船九州行ノ筈ナリシモ、岩倉卿暗殺ノ訛言解纜ノ際、數名ノ警官俄カニ船中ニ臨檢シ、嫌疑ノ人物ヲ搜索シタルヨリ、鎮西行ヲ見合セ、江藤氏ト分袂上陸シタリ、)現在佐賀ノ形勢タル憂國党ノ旗ヲ翻ヘスハ朝夕ヲ測ルヘカラス、現ニ政府ノ命ヲ受ケテ鎮撫ノ為メ來県シタル秋田県令島義勇氏ハ、反ツテ其党ノ為メニ擁セラレ、以テ牛耳ヲ執ルノ己ムヲ得サルニ至ル、勢斯ノ如シ、余ノ力ヲ以テ制シ易カラス、足下庶幾クハ、此形勢ヲ察知シ其兵ヲ発スルノ時機ヲ失セサラン事ヲ、故ニ足下ハ程ヲ併セテ高知ニ歸リ、疾カニ兵ヲ挙ケ聯絡ヲ通シテ必ス共同動作ノ過マラサルヲ誓ハント、是ニ於テ林氏ハ之ニ答ヘテ曰ク、文事ニ於テハ余足下ニ及ハサルヲ知ルモ、用兵ノ術ニ於テハ蓋シ或ハ讓ラサル可シ矣、就テハ足下ニ対シ特ニ一言スルハ他ニアラス、拳兵時機ナリトス、今日之ヲ誤ラハ実ニ千載ノ遺憾タリ、目今佐賀ヤ薩摩ノ一角ニテ小數ノ志士カ兵ヲ

拳ケタリトスルモ、熊本・大坂ノ二城ヲ奪略セサル間ハ、所詮宿望成就スヘカラス、故ニ余ハ切りニ西郷氏ニ説キタルモ、彼レ余ノ意見ヲ容レス、薩南ノ健児ハ必ス肝腦地ニ塗ルニ至ラン、最早薩摩トノ聯絡ヲ取ル事ハ不可能ニ帰シタルヲ以テ、責メテハ事ヲ発スルノ時期丈ケナリトモ三方相俱ニ為シ度モノト考ヘ居レリ、如斯シテ南洲兵ヲ薩南ニ拳ケ熊本城ヲ囲ム時ハ、余ハ驟然土佐ノ兵ヲ提ケ慥カニ大坂城ヲ乗取ル事ハ方寸ノ裡ニ在リ、足下ハ其際全時ニ佐賀ニ兵ヲ拳ケラレナバ天下ヲ動カス事易々タラン、是以テ必ス輕拳妄動ヲ戒メ、土左ト薩摩ガ兵ヲ起ス迄ハ飽迄持重シ、憂國党ノ青年志士ヲ抑サヘ動カス事ナキ様特更注意セラレ度、且ツ愚弟高俊兵ヲ率ヒ当地ニ来タル由ナリ、果シテ然ラハ愚弟用兵ノ術凡ナラス、深ク留意鎮撫セラルヘキト切実忠告シタリシカ、尔降果シテ岩村高俊ハ佐賀県権令ト為リ、馬關ヨリ鎮台兵ヲ率ヒテ佐賀ニ臨ムヤ、遂ニ佐賀ノ憂國党ハ騎虎ノ勢、江藤氏等ノ勢力ヲ以テ之ヲ制御スル能ハ勃発大惨敗ノ極ニ至レルナリ、初メ江藤氏ノ佐賀ニ帰ルニ方リ、一日副島氏ノ宅ニ抵リ、昨冬廟議ノ破裂ニ因リ県下憂國党ノ憤激甚タ

熾烈ト為リ、一日モ速ニ之ヲ鎮撫セサレハ如何ナル擾乱ヲ醸モスル程難測ヲ慮カリ、副島氏ト鳩首協議ノ末、遂ニ副島・江藤ノ両氏ハ相伴フテ佐賀ニ還リ、直接鎮撫ノ外良図之レ莫シトノ事ニ決定セシ際、恰カモ好シ、板垣氏ハ副島氏ヲ訪問セハ、両氏ノ面色頗ル憂苦ノ情景アルヲ看察シ、直ニ其事情ヲ尋ネバ、佐賀ノ政情切迫シ到底抑ヘ難キノ情勢ヲ詳陳シ、我々兩人帰県ノ上飽迄之ヲ鎮請セントノ事ヲ今乃チ兩人ニテ密議シタル処ナリトノ事ナリシカバ、板垣氏ハ其憂慮ノ切ナルハ之ヲ諒察スルモ、此際両君ノ帰県ハ平生貴県下ニ於ケル憂國党ノ両君ヲ景慕スル今日、却テ益々其激憤ヲ増大ニシテ愈々制抑スヘカラルニ至ラン、寧ロ両君ハ依然東京ニ留リ、誰レカ別種ノ人士ヲ撰択シ、両君ノ代理トシテ今姑ラク隱忍時機ノ到来ニ諛ツヘキ事ヲ充分ニ衡論セシムルニ如クハ莫カルヘシトヒ言テ、極力二氏ノ相携ヘ西下ノ不利ヲ諫止セハ、江藤氏ノ言ニ曰ク、足下ノ好意実ニ謝スルニ語ナシ、然ルニ如何セン、現下ノ事情ニ對シ我々兩人ニ代ハリ鎮撫ヲ任スヘキ人物モ無之、去リ逆テ此儘ニ差措カハ激昂ノ余マリ忽チ勃発スヘ

キハ頓然ノ時態タルヲ以テ、折角足下ノ御忠告モ有之タル事ニテ、且ツ副島氏モ目下微恙中ニ付、全氏ハ此儘滞京シ、先ツ余耆人西下スヘシトノ事ヲ熱心主張シタルヨリ、副島氏モ之ニ同意シ、遂ニ江藤氏一人佐賀ニ帰還シタル事実ナリトス、儼シモ副島氏カ江藤氏ト相俱ニ西下スルニ於テハ、恐クハ副島氏モ佐賀變乱ノ渦中ニ捲キ込まレタルハ必至ノ勢ナラン、蓋シ板垣氏ハ当年ノ事情ニ対シ、余カ副島ヲ訪ハサリセハ無論蒼海翁(副島氏ノ号ナリ)ハ江藤氏ト其末路ヲ齋(齊)フシ、折角邦家ニ対セシ対外ノ政策上百年ノ卓越達觀ノ經綸偉業モ、一朝泯滅スルニ至リシナラント言ヒテ、副島氏ニ対シテハ其危路ニ趨カサリシヲ深く欣喜シ、江藤氏ニ対シテハ其危路ニ投シタルヲ痛ク慨歎セラレタルナリ、是ニ由リ之ヲ觀レハ、副島氏ノ後年迄天命ヲ保チ身ヲ終リタルハ、全ク板垣氏ノ忠告庇護トモ謂フヘキ乎、

是レヨリ先キ西郷氏カ政府ニ対シ無断無届ヲ以テ都門ヲ退クヤ、所述ノ如ク板垣氏ハ一夜西郷氏ヲ訪ヒ後事ヲ議セントセシモ之ヲ避クルノ言アリ、今亦タ林氏ニ対シ尚ホ其意中ヲ暗示シ兎角連合ヲ辞スルニ

至レルハ、要スル処曾テ板垣氏ニ答ヘシ如ク、強力ヲ以テ政府ヲ奪フノ豪語ヲ固執セシモノナルカ、西郷氏ハ独力薩南ノ健児ヲ提ケ天下ニ呼号セハ、(親カ)輒スク其目的ヲ達成スヘシト自負驕傲ノ意堅キニ因リタルモノナラン、然リト雖トモ事志ト違ヒ、城山ノ朝露ト化スルノ日、林氏ノ往訪ヤ曩時板垣氏ノ来訪等ヲ回想セハ、西郷氏ヲ首メ諸領袖モ恐クハ無量ノ感慨ニ勝ヘサリシモノアラン、去リナカラ英雄ノ心事ハ英雄ニアラサレハ之ヲ識ル事能ハス、西郷氏ノ独断反旗ノ心事ハ輕易肘度スヘカラサルナリ、或ハ説ヲ為スモアリ曰ク、西郷氏挙兵ノ前ニ方リ、当時尤モ勢力アリシ土佐派ニ対シ、飽迄通牒ヲ避ケタルハ、抑モ何ノ故ナル乎、蓋シ聞ク、往事西郷・板垣両氏カ討幕ノ密議ヲ為スヤ、雙方種々ノ事情ニ妨ケラレ、屢ハ事機ヲ逸シタル際、突如トシテ大政奉還ノ論、坂本(龍)・後藤(象二)二氏ノ提唱スル所トナリ、旧主山内老侯之ヲ採用シ幕府ニ建言スルヤ、慶喜公ノ聡明直ニ之ヲ聴納シテ、闕下ニ奏請ス、時偶々薩・長ノ急激党ハ岩倉卿ト結托、計画シタル討幕ノ密勅並ニ會・桑両藩主誅戮ノ内勅迄当日竊

カニ薩・長二藩主ニ降下セントセル折柄ナリシカバ、
 両藩モ事ノ意外ニ出テシヨ驚愕スルノミナラス、土
 人ノ為メニ一着ヲ輸スルヲ歎シタリト云フ、且ツ西
 郷氏屢々板垣氏ノ用兵非凡ナルヲ称揚シテ措カサル
 ト、林氏カ夙トニ大坂城奪略ノ壮図ヲ抱ケルヲ予知
 シ居リシヲ以テ、一旦土佐派ニ反旗ノ通牒ヲ為サハ、
 土左兵ハ必ス大坂城ヲ襲ヒ、之ヲ根拠トシ天下ヲ制
 スル首功ノ偉業ヲ又復タ土左人ニ収メラル、ヲ懸念
 シ、独力政府ヲ顛覆シテ天下ニ号令セント欲シタル
 ナラント、果シテ然ルヤ否ヤハ知ル能スト雖トモ、
 姑ラク其聞ク所ヲ附記シテ之ヲ大方ニ質ス、
 西郷氏カ廟堂ニ於テ遣韓大使論争ノ際ニハ、閣僚中
 唯独り板垣氏ノ声援ヲ得ント欲シ、為メニ拾数回ノ
 依頼書ヲ寄セ熱誠ニ其斡旋尽瘁ヲ切望シ来レルモ、
 一朝廟議破裂ト為ルヤ、邦家ノ前途ニ対シ、板垣氏
 ハ深く憂慮ノ余マリ、所述ノ如ク国家ノ為メ後事ヲ
 協議セントシタルモ、暗ニ之ヲ避ケントシ、亦タ林
 氏カ板垣氏ノ代理ト為リ西郷氏ヲ鹿兒島ニ訪ヒタル
 モ、復タ協同ヲ辞シタルカ如キハ、実ニ我々旧同志
 者ノ于今至ルモ疑訐憤慨ニ耐ヘサル処ナリトス、然

ルニスノ疑訐タル、思フ二十年ノ戦役ノ半ニ方リ、
 桐野利秋氏ノ意見ナリトシテ、土左立志社設立ノ趣
 旨、暨ヒ全社ノ言動ヲ誹謗シ、土左人士ヲ称シテ事
 ヲ共ニスヘカラサル狡猾人ナリトノ説ヲ当時ノ某御
 用新聞紙上ニ掲載シタル記事アリタル事ヲ想到スレ
 ハ、桐野氏ノ意見タル、畢竟土左ノ挙動行為ヲ誤想
 猜疑シタルヨリ、偶々這ノ説ヲ発シタルモノナル乎
 ト思ヘルナリ、現ニ桐野氏ハ大政返上ノ為メ後藤氏
 カ京都ニ於テ日夜奔走シタル場合、全氏ヲ猜忌之ヲ
 暗殺セント欲シタル事アルモ、痛ク西郷氏ノ叱責ヲ
 享ケ阻止シタル実例モアリタルナリ、或ハ十年ノ戦
 役中、政府ハ特更士佐(殊カ)ト薩摩トノ連絡ヲ恐怖シ居タ
 ル秋ナレハ、是レハ離間中傷ヲ策トシタル記事ニテ、
 其実桐野氏ノ関知セサル処ニテ、全ク某御用新聞ノ
 捏造タル程難計ナリ、亦タ或ハ桐野氏ヲ首メ西郷氏
 部下ノ領袖ハ飽迄土佐ヲ猜忌シ、西郷氏ヲ撃射シテ
 西郷・板垣両氏ノ協戮、又ハ土左ト薩摩トノ合同ヲ
 阻止セシメタルモノナル乎、又ハ明治八年木戸・大
 久保・板垣・井上ノ四氏カ大坂ニ会合ノ結果、木戸・
 板垣両氏ハ再ヒ台閣ニ出テ政軸ノ顛換ヲ来タシ、明

治廿三年ヲ期シ国会ヲ開設スル

聖詔ト為ルヤ（元勲調停ノ事タル陸奥・古澤滋・小室信夫ノ諸氏、井上氏ト謀リ大ニ朝野ノ間ニ奔走周旋シタル結果ニシテ、先ツ新タニ元老院ヲ設ケテ上院ニ擬シ、地方官會議ヲ以下院ニ充ツノ意ナリシト、且ツ長岡ガ土左ノ勢力ヲ仮リ薩閩ノ専權ヲ抑ヘントシタルニ在リト云フ）、西郷氏ヲ始メ部下ノ領袖ハ、兎角木戸氏ニ対シ不平ノ心意アリシヨリ、一層慊焉タラサルモノト為リ、益々薩・土ノ聯絡ヲ避ケタルモノナラント云フモノアリ、（西郷氏カ木戸氏ヲ嫌惡シタル事情ハ、予之ヲ詳ニセサルモ、木戸氏ハ西郷氏ノ反旗ヲ慨シ、病ノ危篤ニ瀕スルモ只頻リニ西郷未タ戦ヲ止メサルカト歎声ヲ発シツ、瞑目シタリト云フ）、是レ実ニ今日ニ至ルモ其真相詳ナラサル所ニシテ、後世永ク史上ノ疑問タルナラン、蓋シ西郷・板垣二氏ノ間タル、当初ヨリ内外ノ大勢ヲ達觀シ、邦家百年ノ長計ヲ企図シ、終始一貫互ニ一死ヲ賭シテノ提携ナラハ、豈何ソノ一家郷党ノ私情私怨ヲ以テ国事ヲ忽諸ニ附スルカ如キ心事ニアラサリシハ、疑ヒヲ容レサル可シ、

第五 西郷氏兵ヲ誤ル

一薩軍ノ兵ヲ挙クルヤ、天下ヲ席捲スルノ勢ヲ以テ熊本城ヲ攻略セント欲シ、銳兵健卒危ヲ冒シテ奮闘スルモ、遂ニ其目的ヲ達スル能ハス、板垣氏歎声ヲ発シテ曰ク、西郷兵ヲ誤ルト、何トナラハ熊本城兵ノ嬰守ニ対シ、薩軍ハ式千ノ兵ヲ殘シテ之ヲ包囲シ、自余ノ精兵ヲ挙ケテ馬關ニ突出セハ、天下ヲ制スル事何ノ難キ事是レアラン哉、奈何トナラハ、当時天下ノ形勢タル因州・備前・紀州・金澤・庄内ノ各地ニ於テモ、内応崛起ノ盟約アルモ謀コト此ニ出テス、因州ハ今井鐵太郎氏、備前ハ杉山岩三郎・中川横太郎二氏、紀州ハ陸奥派ノ津田出・山東直砥・兒玉仲兒ノ三氏、金澤ハ富樫某・島田一郎・長連豪ノ諸氏、（庄内ハ管野氏ノ派ナラン乎）、奮躍難ニ殉スルノ機会ヲ得スシテ而シテ寢ム、板垣氏ノ兵ヲ誤ルヲ長歎ス、実ニ知言ト云フ可シ矣、

第六 近衛兵ノ瓦解ト征韓兵ノ部隊並ニ

西郷・板垣二氏ノ戦略

一土佐挙兵ノ基因タル征韓論潰裂ノ結果、近衛兵ニ在勤セシ將校以下兵士ニ至ル迄、扼腕切齒ノ余マリ（明治三年薩・長・土三藩ヨリ御親兵ヲ徵セラレタルハ、戊

辰大改革ノ際三藩ノ兵力最モ著シク強兵ナルヲ以テ其兵ヲ徵シ 皇城ヲ守護シ、且ツ政府ノ基礎ヲ鞏固ニスルト、天下ノ制御上ニハ強藩ノ精兵ヲ 鞏下ニ駐屯セ

シムルヨリ急ナルハ莫シトシ、之ヲ召集シ、翌四年之ヲ近衛兵ト改称シタルモノニテ、現時近衛兵ノ元祖隊ナリトス、当時薩藩ヨリ砲兵式大隊・歩兵四大隊、長藩ヨリ歩兵三大隊、土藩ヨリ砲兵式大隊・歩兵式大隊・騎兵二小隊・工兵二小隊ヲ献兵シタリ)、病ト称シ帰県スル者頗ル多ク、(薩兵ノ將校以下、亦土兵ト全断帰郷シタリ)、為メニ近衛兵ハ僅カニ長藩ヨリ在勤スル歩兵式大隊(初メ長藩ハ三大隊ノ献兵ナリシモ、尅大隊解隊シテ二大隊ト為レリ)、薩・土二藩ヨリ残留在京スル僅少ノ兵隊ヲ以テ 皇城並ニ帝都ヲ守護シタリ、当時近兵ノ瓦解ハ実ニ天下ノ耳目ヲ驚駭セシメタルモノニシテ、是レ畢竟征韓ノ事ヲシテ実現スル場合ハ、薩・土二藩ヨリ出タセシ近衛兵ヲ以テ出征セシムルノ実勢タルヨリ、近衛兵ノ瓦解スルモ亦怪ムニ足ラサルナリ、但シ西郷氏ハ陸軍大將兼参議ト云フ文武兩職ノ高官タルヲ以テ樽俎ノ使節ヲ担任シ、板垣^(伊知地)・伊知地^(伊知地)兩氏カ陸海軍ヲ督シテ対州風本ニ駐屯シ、使節ノ談判

破裂セハ直チニ征韓ヲ実行スル協議ハ、西郷・板垣・伊知地三氏ノ間ニ約セラレタリシト聞ケリ、今其事情ヲ叙スレハ左記ニ就キ之ヲ窺フヘシ、

一 桐野少將ハ征韓ノ兵員ハ十大隊ヲ以テセハ充分ナリト云フ、又韓国ノ視察ヲ了ヘ帰朝シタル別府少佐ハ、二三個中隊ノ兵員ニテ足レリト壮語スト云フ、然ルニ西郷氏ハ一切ノ戰略ヲ挙ケテ之ヲ板垣・伊知地二氏ニ委スルノ考ヘナリキ、何トナラハ二氏ハ東奥ノ戦役ニ於テ其將才ノ凡ナラサルヲ顯ハシタルヨリ深ク之ニ信スル処アリト云フ、而シテ諸氏等屢ハ太政官ニ於テ征韓ノ戰略ヲ立テ、互ニ之ヲ論議セルニ方リ、西郷氏ハ先ツ兵ヲ北韓ニ上陸セシメ、平壤ヨリ京城ヲ包撃スルノ謀ニ出テバ、恰カモ囊口ヲ括シテ物ヲ探ルカ如ク韓廷遂ニ北クルニ途ナカラント、副島氏之ヲ贊成シタルモ、板垣氏ハ之ヲ否トシ蒙昧韓国ノ如キヲ對手トスル戦闘ニアリテハ先ツ其君主ヲ擒ニスルヲ主眼トスルノ必要ナルハ亦タ余モ貴説ト見ル処ヲ一ニス、然レトモ其戰略トシテハ、北方ヨリ南下シ、之ニ依テ全然敵ヲシテ遁路ナカラシメントスルハ難事ニ属ス、故ニ兎ニ角兵ヲ釜山ニ上陸セ

シムヘシ、然ラハ事ニ迂ナル韓人ハ必ス全力ヲ釜山ニ尽クシテ我軍ヲ撃破セン事ヲ努ム可シ、此時ニ當リ我ハ全軍ノ三分ノ一ヲ釜山ニ残シ、三分ノ二ハ海上直チニ之ヲ江華灣方面ニ送リテ突如京城ニ肉薄シ、其間ニ於テ更ニ釜山軍ヲモ海路平壤ニ送致シ、以テ敵ノ退路ヲ塞カハ其成功スヘキヤ疑フヘカラスト、西郷氏素ヨリ板垣氏ノ將才ヲ推スヲ以テ敢テ争ハス、(伊地知)伊地知氏ハ又少シク其規模ヲ大ニシ大兵ヲ用ヒン事ヲ要トシタルト云フ、

二西郷氏ノ決心己レ韓国ノ土ト化シタル曉ハ、政府ハ堂々征韓ノ軍ヲ派遣スヘク、其進軍ノ戰略ニ就テハ一三板垣・伊知地ノ二氏ニ委スヘシトノ事ニ門下中ノ領袖ヘ秘洩シアリト云フ、

第七 (佐)土左拳兵ノ真相ト機密ニ参画者ノ氏名

附タリ後藤・林二氏木戸参議ニ

対シ征討軍ノ懲慥ト木戸氏ノ陳謝

一西南ノ風雲益々急ヲ告クルヤ、勁捷義ニ勇ムノ土佐人土奈何ソ拱手傍觀スヘケン哉、殊ニ近衛兵ニ在勤シタル將校ハ一層憂憤ノ余マリ屢ハ板垣氏ヲ訪フ、板垣氏天下ノ大勢ヲ論シテ曰ク、維新大業ノ方針未タ確立セ

ス、天下ノ人心方向ニ惑フノ際、政府ハ宜シク非常ノ決心ヲ以テ内外ニ対スル政策ヲ確立ス可シ、而シテ頭ヲ畏レ尾ヲ怖レ逡巡趨避シテ何ノ為ス所ナキ政府ニ対シ、西郷カ薩・隅・日三国ノ兵ヲ提ケ天下ニ呼号セハ、恐クハ其目的ヲ達スヘシ、故ニ薩軍馬關ニ押シ渡ラハ、土左人士ハ猛然蹶起シテ共ニ其志ヲ成シ、以テ天下ヲ經營スヘキナリト、会スル者皆奮躍シ異日ノ壮挙ヲ期シタリキ、

當時板垣氏ハ高知城外潮江村新田シタタノ別荘即チ旧藩主山内家新築ノ別亭ヲ購ヒ之ニ移居シアレハ、機密ニ関スル協議ハ皆板垣邸ニ於テセリ、而シテ右機密ニ参加シタル者ハ、谷重喜氏(元陸軍大佐、大)・片岡健吉氏(元海軍)・岩崎長明氏(元陸軍少佐)・池田應助氏(元熊本鎮台司令長官、官野)・山田平左衛門氏(戊辰ノ役薩兵近衛隊長ニテ、伏見ノ)・金子宅利(元近衛兵)・小谷正元(元陸軍士官)・平尾喜壽三氏(三氏共近衛)・島地正存氏(元砲兵大)・廣瀬爲興(元陸軍士官)等以上ノ拾名ナリトス、外人ニテ、夙トニ其企図胸中ニ藏メ、且ツ独逸銃「スナイドル」式参千挺、上海ヨリ葡人「ローザ」ノ手ヲ以テ購入ノ件ト、白髮山ノ大森林ヲ政府ニ売戻ノ用務

ヲ帯ヒ、多クハ東京ニ滞在シ、西山澄志氏ハ当時阿波
 国高知県ニ合併中ニ付、徳島支庁長ト為リ赴任シ、不
 在勝ナルヲ以テ参与スル事甚タ稀レナリトス、蓋シ林
 氏ノ白髪山売戻(約拾万円)ノ目的ハ挙兵上独統購求ノ必要
 アルヲ以テ尤モ熱心ニ奔走シタリ、而シテ購入ノ担任
 者ハ岡本健三郎氏(元大藏省大藏)・中村貫一氏(元香川県書記官)両氏ナ
 リ(岡本氏ノ手ニテ独統ハ百挺ハ購入シタリ)、又大江卓氏(元神奈川縣梅合)ハ陸奥氏ト
 相謀リ土左ノ挙兵ニ乗シ、政体ヲ改革シ要路ノ大官ヲ
 暗殺スル謀略ヲ運ラシ、其目的ヲ以テ京坂間ニ奔走シ
 タリ、

是レヨリ先キ板垣氏ノ東京ニ御用滞在中、木挽町陸奥
 宗光氏ノ寓所ニ於テ板垣・後藤二氏ヲ首メ林・大江ノ
 五氏ト相会スルモ、未タ西南ノ事情充分詳ナラサルヲ
 以テ、要領ヲ悉クサスシテ散会、異日ノ再会ヲ約セシ
 モ、当年ニ於ケル土左ノ方向ハ実ニ是ノ時ニ略定シ、
 板垣氏ハ土佐ニ帰臥スル事ト為リタリ、然ルニ尔降、
 西南ノ風雲ハ益々急ヲ告ケ、其警報日夜間断ナキヲ以
 テ、後藤氏ハ林・大江氏等ヲ伴ヒ京都ニ登リ、木戸參
 議ニ面会シ(大江氏ハ事故アリ、全行セサルナリ)、薩南ノ形勢弥々險惡ナ
 リ、宜シク速カニ征討軍ヲ発スヘキヲ勧告セシモ、木

戸氏未タ之ヲ信セスシテ曰ク、目下川村純義・林友幸
 ノ二人ヲ鹿兒島ニ出張セシメ視察中ニ付、其申報ヲ俟
 チ確定スヘシト、併シ余ハ思フニ、西郷ハ未タ反旗ヲ
 翻ヘサルヘシト言ヒケレハ、林氏ハ西郷氏ノ性格並
 ニ私学校党ノ近状ヲ詳陳シ、切ニ其謬見ヲ駁シタルモ、
 当日ハ其儘ニ相分レタリ、而ルニ尔後数日ヲ出テサル
 ニ、反旗愈々九州ノ野ニ翻リタレハ、木戸氏ハ後藤・
 林氏ノ寓所(カ松)ヲ訪ヒ林氏ノ先見ヲ歎稱シ、征討ノ
 詔勅煥発スヘキヲ告ケ陳謝シタリト云フ、蓋シ後藤・
 林氏等カ木戸氏ニ対シ征討ノ議ヲ提言シタル真意ハ、
 羸弱ノ政府ヲシテ、國家ニ重大ノ事端ヲ惹起セシメ、
 一旦政府ヲ羸天踴地ノ究地ニ陥ラシメ、然后自己等ノ
 目的即チ天下ノ大刷新ヲ計ラント欲シタル一大野心ノ
 抱負企圖ニ外ナラサリシナリ、

但シ陸奥氏ノ寓所ニ板垣・後藤・林・大江五氏ノ密
 会スルヤ、板垣氏ハ西郷ノ反旗カ事実ト為ル咍ハ、
 薩兵ハ必ス一意熊本城ヲ攻略セント欲スル策戦ニ出
 ツルニ相違ナシ、然レトモ嬰守ノ城兵ヲ屠ラント欲
 スルハ頗ル戦略ノ拙ナルモノニシテ、飽迄之ヲ攻略
 スル事ヲ避ケ単ニ之ヲ包圍シテ置キ迅雷耳ヲ掩フノ

暇ナキ勢ヲ以テ馬關ニ突出スルヲ上計トスヘシ、殊ニ城將タル谷干城ノ如キハ、其性格上包囲軍ヲ突撃スルコトハ必ス為シ得サル事ヲ看破シ居レハ、薩兵ハ式千ノ兵ヲ以テ城兵ヲ包囲セハ夫レニテ安全ナリトシ、板垣氏カ戊辰戦役ノ際官軍ノ参謀トシテノ作戦ニ棚倉城攻略ノ際、豊公カ長曾我部氏ヲ四国ニ討スルヤ、上国兵ハ四国兵ノ各所ニ築設シタル諸砦ヲ攻撃セスシテ過キ去リシ戦略ヲ襲キ、賊軍ノ棚倉街道ノ關山ニ大兵ヲ集中シアルモ之ヲ討撃セス、驀地ニ棚倉城ヲ襲撃シタル籌算部テ其機ニ中リタル実例ヲ挙ケ、薩兵ノ這戦役ニ際シ戰略ヲ誤ラン事ヲ予想シ、頻リニ之ヲ危虞シタリト云フ、而シテ薩軍中特(小兵衛)リ西郷氏ノ三弟小平太氏ノ如キ、較ハ板垣氏ノ作戦ノ如ク熊本城ニハ多少ノ抑サヘ兵ヲ置キ之ヲ包囲シテ、全軍長崎ニ出テ別途企画セント欲シタル事アリシモ、領袖ノ容レサル処ト為リシヨリ痛ク之ヲ憤激シ、必ス薩兵全部ノ犬死ニ畢ラン事ヲ慨シ、其戦死ヲ早メタリト云フ、

第八 土左兵出軍ノ方向並ニ古勤王派トノ聯絡(佐)

暨ヒ政府要路ノ顯官暗殺ノ計画

一 拳兵ノ時機ト土左兵ノ向フ部署タル二方面ト為セリ、一ハ大坂城ヲ奪略シ之ヲ根拠トシ、一ハ松山城ヲ攻撃シ、中国筋ニ突出シ薩兵ニ合スルノ謀略ナリトス、蓋シ大坂城ニハ当時僅カニ一二個中隊ノ歩兵アルノミニテ、又京都ノ行在所ニモ總カニ大津ノ兵營ヨリ派兵シアル一二個中(隊別カ)ノ守護兵ノミニテ、自余ハ皆西南征討軍ニ從軍ノ場合ナルヲ以テ、頗ル少数ナル事実ヲ探知スルト、傍ハラ大坂城内ニハ独銃「スナイドル」(モリ挺ヲ残留シ、其彈藥ハ紀州和歌山(紀藩ノ兵式ハ快速式ニテ疾ク)「スナイドル」銃ヲ採用シタリ)ニ於テ製造スルノ情報モ聞ヘ、亦タ松山城モ僅カニ二三個中隊ノ兵ヲ残シ、自余ハ拳ケテ西南征討軍ニ参加シタレハ是モ少数タリ、而シテ大坂城ヲ攻撃スル戰略ハ、谷重喜氏之ヲ統率シ、林氏ハ各社ノ壯士並ニ旧近衛兵士等五六百ノ精兵ヲ提ケ、山田平左衛門・池田應助・島地正存・廣瀬爲興ノ四氏ヲシテ其部隊ニ長タラシメ、泉州堺ヨリ上陸シ、驀地ニ夜襲ヲ以テ大坂城ノ空虚ヲ襲ヒ之ヲ奪略シ、紀州兵ノ來援ヲ俟チ、中国・九州・四国・北陸ノ方面ニ架シアル電線ヲ切断シ、官軍トノ聯絡ヲ断チ、薩軍並ニ加州・因州・備前等ニ飛檄ヲ發スルノ計画ヲ為シ、且ツ大坂警察署ヲ襲ヒ政府ヲ

顛覆スルノ先驅ヲ為スノ雄図ヲ策シタリ、而シテ一方
松山城ヲ攻撃シ中国筋ニ躡進スルノ土佐兵ハ片岡健吉
氏之ヲ統率シ、岩崎長明・平尾喜壽・金子宅利・小谷
正元・行宗貞義(元近衛卿
兵大尉)・水野重規(元近衛卿
兵大尉)氏等ヲ以
テ亦タ其部隊ニ長タラシメ、且ツ古勤王組ト称スル東
西七郡ニ散在スル憂国ノ志士並ニ各社ノ壮士ヲ合セ凡
ソ尅千人内外ヲ以テ松山城ニ向フノ方略ナリトス、蓋
シ東郡即チ高知以東ノ古勤王党ノ數隊ヲ統率スル領袖
ハ大石彌太郎・森新太郎・池知退藏等ノ諸氏ヲ始メ、
岡甫助翁モ其首領ノ内ニアリトス、而シテ高知以西即
チ高岡・幡多二郡ノ旧勤王派ヲ首メ壮士凡ソ三四百人
ハ桑原平八・佐田家親・宮崎頼太郎・宮川小作・石原
盛俊等ノ諸氏之ヲ率ヒ、豫州宇和島通リ松山城ニ進軍
ノ計画タリ、

但シ谷重喜氏ハ元大坂鎮台司令官ニテ数年大坂城ニ
アリシヨリ、其地理並ニ城内ノ要害ハ夙トニ知悉ス
ル処ニシテ、天下ノ形成益々切迫スルヤ一日林氏ヲ
急訪シ、最早大坂城ヲ乗取ルハ今日ノ機會ヲ逸スヘ
カラスト云ヒ、熱心大坂ヘノ進軍ヲ促進シタリ、而
シテ大坂城襲撃ノ策戦ハ実ニ林・大江二氏ノ計画ナ

リトス、殊ニ林氏ノ此着眼ハ明治七年三月ノ上旬、
今氏カ大坂ヲ經テ西郷氏ヲ鹿兒島ニ訪フノ時ニ発シ
タリキ、是故二十年ノ戦役ト為ルヤ、林氏ハ官憲ノ
耳目ヲ避クルカ為メ物見遊山ニ仮托シ、芸妓數名ヲ
伴ヒ泉州堺ヨリ天王寺附近ヲ始メ、大坂城以南ノ地
理ヲ連日視察シタルコトアリトス、而シテ当時高知
ニハ各社ノ壮士團結アリ、即チ北街ニ共行社、江ノ
口ニ有信社、小高坂及ヒ上街ニ嶽洋社、潮江ニ発陽
社、南街ニ脩立社、高知町ニ逍遙社、六社アリ、亦
タ宿毛ニ合立社アリテ互ニ相競ヒ、政治ヲ談シ欧米
新書籍ヲ購ヒ盛ニ文学・武事ヲ研鑽精勵シタリ、這
人員凡ソ尅千二三百人ナリ、

而シテ大江氏カ後藤・林氏等ト相分レ京都ヨリ大坂ニ
急行シタル目的ハ、当時大坂ニハ大久保内務卿ヲ首メ
西南征討軍ノ軍務ヲ總統セル鳥尾中将等ノ在ルヲ以テ、
此機會ニ乘シ右等ノ要地ニ在ル諸氏ハ不及申、在廷ノ
重立タル諸顯官ヲ暗殺シ、兎ニ角征討軍ノ氣勢ヲ沮喪
セシメ、天下大混沌ノ間ニ薩兵ト東西呼応シ、政軸ノ
大転換ヲ謀リ局面ノ大革新ヲ遂セント欲スル企図ヲ抱
キシヨリ、彼ノ川村矯一郎(大分県
中津人)、又ハ岩神昂(元高知
県少爺)

官^(記)ノ両氏ニ其秘密ヲ告ケ日夜画策ヲ怠ラサリシナリ、

元来土左兵ヲ以テ大坂城奪略ノ意図計画ハ、上述ノ如^(巻)

ク実ニ林・大江二氏ノ熱心ナル目的ニシテ、尔後西南ノ戦鬪酣ト為ルヤ益々其必要ヲ認メ、這遂行夢寐ニモ忘ル、事莫カリシハ、畢竟土左兵カ弥々激発大坂城ヲ根拠トセハ、薩兵ハ熊本城攻撃ノ手ヲ分チ其東上ヲ容易ナラシメ、且ツ紀州・因州・備前・加州・庄内等ニ予シメ氣脈ヲ通シ置ケル諸団体ニ向ヒ、速カニ策慮スヘキヲ促カシ、征討軍ノ諸兵ヲシテ狼狽困頓セシムルノ謀略ニ出ツルモノナルカ故ニ、両氏ハ日夜此計画ヲ懈ラサリシナリ、(林氏ハ拳兵ノ主魁ニシテ、大江氏ハ大臣暗殺ノ主謀タリ、故ニ土左兵ノ拳兵ト同時ニ暗殺モ企時ニ決行ノ筈トシタリ)、

但シ明治十七年七月林・大江両氏ノ仮出獄ト為リ帰^(傳文) 県ノ途次東京ニ滞在スルヤ、伊藤氏(傳文)ハ林・大江両氏ニ語リテ曰ク、十年ノ役、足下等ノ企画セシ如ク当時大坂城ヲ襲撃スルニ於テハ、之ニ対スル防禦ノ兵力莫カリシヨリ、必ス其目的ハ達成シタルニ相違ナシ、幸ニシテ其実行ナカリシハ政府ヲ首メ我々ノ幸福ナリシト、若シ夫レ果シテ大坂城奪取ノ挙

ト為ラハ、我々ハ不得止

主上ヲ奉擁シテ、一旦丹波地ニ逃レ、東京ニ還幸ヲ奏請シ、後図ヲ為ス外何ノ策モ無カリシト云ヒ、深ク林・大江氏等ノ策戦ニ戰慄シタリト云エリ、又川村純義氏モ大江氏ニ語リテ曰ク、土佐兵カ大坂城ヲ奪略セハ、直ニ城兵ノ散乱スヘキノミナラス、銃戦ノ如キハ鎮台兵ニテモ充分對抗シ得ルモ、土左兵カ得意ノ接戦抜刀ヲ以テ斬リ込ミ来ラハ、忽俟チ潰敗スヘキハ顯然ナリト言ヘリト云フ、

第九 土佐兵出軍ノ時機ト高知城下ノ危機一髮

附タリ小池県令時難ニ斃ル、ノ覚悟

一 土佐兵ノ大坂城又ハ松山城ヲ襲撃スルノ時機タル、一時ハ不幸ヲ与フルモ高知一帯ヲ大混乱ノ巷ニ変セシメ、而後高知ヲ発スル計画ナリシモ、大坂行ノ出兵ハ汽船ノ便ヲ借ラサレハ不可能ノ土地柄ニ付、林氏カ上海ニテ葡人ヨリ取寄スル独銃「スナイドル」式千挺積載着船ノ報近キニアルヲ期シ、此着船ヲ俟チ断行シ、両軍海陸二途ニ分レ進軍スル事ニ定メタリ、尚ホ此決行ニ先タチ高知ヨリ東西北ノ三方へ架設シアル電線ノ切断・県庁ノ放火(烽火ノ代用ヲ兼タル)・地方官ノ暗殺等ハ決死党

ノ志士即チ旧近衛兵ノ壯士數十名カ之ヲ担任シタリ、乃チ其人員氏名ノ如キハ今ハ之ヲ遠慮スヘシ、尔後薩兵ノ勢日ニ疊リ熊本城ノ困ハ解ケ、天下ノ大勢漸ク定リタルヨリ、立志社員ニシテ県庁ニ奉職シタル県官ヲ罷免スル勢ト為ルヤ、其屯兩日前ニ方リ時ノ県令小池國武氏ハ(后藤辺ト復姓シ、大蔵次官ヨリ)、平尾喜壽(第三)・廣瀬爲興(庶務)氏等ヲ官邸ニ招キ酒肴ヲ供ス、宴酣ナルニ及ンテ謂ヒテ曰ク、高知ノ危機朝夕ヲ測ラレスト為シ、予シメ辞世ノ一首ヲ賦シ置キタリトテ机上ヨリ一詩ヲ取り出シテ示シタリ、今其詩作ハ記憶セサルモ小池県令ハ時難ニ斃ル、ヲ決心シタルモノ、如シ、

但シ土左ノ挙兵即チ立志社領袖ノ此計画ヲ為スヤ、参加人員ノ多数ヲ欲スルノ情切ナリシヨリ、島地正存氏ハ古勤王組トノ旧縁アリ、且ツ同氏ノ姻戚タル島村左傳次氏ヲ通シ、古勤王派トノ提挈ヲ鞏固ニシ、又廣瀬爲興ハ東郡古勤王党ノ長老タル岡甫助翁並ニ西郡ノ領袖タル佐田家親氏等ト九反田ノ西山志激氏ノ留守宅ニ密会シ、一層其聯絡ヲ固フシタリ、

當時土佐ニハ英國製ノ中形ト称スル小銃ノ総數僅カニ四五千挺ニ(明治三年・全四年藩兵上京后近衛兵

ト為リ該隊瓦解ノ為メ携帶ノ英銃三四千挺ハ陸軍省用トナル) 過キス、一朝有事ノ際之ヲ纏メ集ムルニ、其所在持主不詳ニ付、県庁兵事係ニ保管スル各種ノ大小銃砲所有者ノ根居帳アルヲ察シ、共行社員ニシテ、当時県庁ニ勤務セル徳永某ヲシテ竊カニ之ヲ自宅ニ持チ帰ラシメ、三日間ニ写取ラシメタルモ格別参考ノ用ニ適セサリシナリ、

第十 西郷氏天下ノ大機ヲ失ス

附タリ非征韓ノ為メ国損巨大並ニ岩倉卿非征韓ノ悔悟

一然ルニ薩兵ハ当初荐リニ熊本城ヲ困ンテ一意之ヲ攻略セント欲シ、桐野・篠原・村田等ノ猛将ハ、薦地ニ上国ニ進出ノ策ヲ為シ將ツテ天下ニ号令セントスルノ雄図ヲ誤リ、只無二無三ニ熊本城ヲ陥レント欲スルノ戰略アル而已ヲ洞察シタル板垣氏ハ、西郷ハ遂ニ兵ヲ誤ルトノ歎声ヲ発セシハ実ニ傾聴スヘキ当年ノ確論ニシテ、果シテ之レカ為メ西郷氏ハ用兵ノ略ヲ衍マリ、千古ノ痛恨ヲ史上ニ貽シタルハ、滿天下ノ浩歎スル処ナルノミナラス、復タ土左ニ於ケル挙兵党ノ扼腕切齒実ニ名状スヘカラサルモノナリ、然ルニ征韓論ノ大反対

者タル木戸・大久保二氏ノ主張セル如ク、当時万機ノ要ハ唯節儉ヲ主トシ財務ヲ經理スルヲ急務トシ、一旦兵ヲ動かサハ出軍ノ資固ヨリ賫リ難ク、其速カニ勝ツモ善後ノ策ナク、勝タサレハ持久ノ方ナク、其弊実ニ道フ可カラサルモノアラシ、又且ツ新政以來百度更革四民業ヲ失ヒ、府庫窮乏増税ニ疑ヲ措クモノ多シ、今若シ外ニ対シ罅隙ヲ失スルアラハ丁壮外ニ斃ハレ、老弱内ニ苦ミ兵器異邦ニ仰キテ財貨ハ日ニ耗シ、上下直チニ困頓セントノ意見ヲ以テ痛ク反対ハ為シタルモ、却テ征韓論破裂ノ為メ、佐賀ノ変乱ヨリ山口又ハ熊本・秋月ノ動乱ニ亞ヒテ遂ニ十年西南ノ大戦ヲ惹起シ、是レカ為メニ耗スル処ノ戦費頗ル巨額ニシテ、復タ諸戦役ノ為メニ両軍死傷ノ人員ヲ算フレハ、無慮數千万人ニ上ルヘキノミナラス、我国著名ノ人傑名士ヲ失フニ至リ、国家ノ大損失タルハ勿論、一般人民ノ蒙リタル有形無形ノ損害モ殆ント測リ知ルヘカラサルモノナリ、苟クモ此ノ不幸蹉跌ナクシテ幸ニ征韓ノ挙ヲ遂行セシメナバ、如何ナル奇功ヲ奏シタルカ知ルヘカラサルモノニシテ、輓近即チ明治四十三年ニ至リ、韓国合併ノ挙ノ如キハ、疾ク已ニ其成功ヲ見タルモノナラント、

之ヲ思ヒ之ヲ顧モヘハ、転タ感慨ニ耐ヘサルナリ、而ルニ明治八年江華灣ノ事件ニ際シ、政府ハ遂ニ兵力ヲ以テ頑冥不靈ノ韓人ヲ屈服セサルヲ得サル事トナルニ及ンテ、副島氏ハ岩倉右府ヲ誥シラル、ニ、對韓善後談判ノ事タル、依然理義ノ能クスル所ニアラス、一ニ兵力ヲ以テスル外策ナキヲ覚醒セラレタルナラント云ヘハ、右府ハ副島氏ニ対シ、六年征韓論ニ反対シタルハ終世ノ過失ナリト謝述シタリト云フニ考フレハ、政府ノ施設ハ尔降愈々齟齬シ、徒ラニ其不明ヲ暴露スルニ止マル事ヲ慨歎シ、竟ニ先年ノ非ヲ悔悟セラレタルニ因ルモノナラン乎、咄矣、

第十一 刺客ノ抽籤

一是レヨリ先キ機密ニ参与シタル諸士、一夜板垣邸ニ会合スルヤ、万一不幸ニシテ西郷失敗セハ政府ハ凱歌ノ歓声ニ妨ケラレテ、民ノ怨言ハ聞ヘサル佛国革命ノ當時ニ比喩シ、必ス我国家ハ其覆轍ヲ見ントテ痛ク邦家ノ前途ヲ憂慮シ、慷慨非憤ノ余マリ、這ノ機密ニ参加スル連中ハ刺客ノ抽籤ヲ為シ、目的ヲ達スル迄交互ニ当路ノ権臣ヲ殺害スヘシト揚言シタル人士モアリタリキ、今其氏名ハ憚ル所アレハ、乃チ之ヲ略ス、

第十二 立志社ノ建白

一薩軍ノ兵氣ハ日ヲ逐フテ沮喪シ、政府ノ威令ハ日ヲ追フテ冲天ノ勢ト為ルヤ、所謂專政抑圧ノ兆候顯著ト為ルヲ以テ、板垣氏ハ一日モ速カニ公議輿論ヲ掘起シ、其檀恣批政ヲ排除スルニアラサレハ、邦家ノ前途憂慮ニ勝ヘサルヲ思念シ、片岡健吉氏ヲ以テ、立志社ヲ代表シ、政府ニ対シ浩澗ナル建白書ヲ提出セシメタリ、実ニ當時天下ノ形勢タル、政府ノ威圧ニ恐怖シ天下國家ノ事ヲ論議スル者寔トニ稀レナルヲ以テ、土佐ノ建言ハ一時天下ノ耳目ヲ聳動セシメタリキ、而シテ初メ建白書ノ起草ハ土居通豫・廣瀬爲興(二氏共)・島村貞雄三氏ニシテ、西野友保氏(元名東典)之ヲ批閱シ、且ツ當時帰省中ノ福岡孝弟氏(元司法大輔ニシテ、后子爵ニ叙セラレ、秘密院顧問官トナル)之ヲ校正シタル末、東京ニテ吉田正春氏(元外務又ハ通信省ノ書記官)更ニ修正ヲ加ヘ、後藤氏ノ訂正ト板垣氏ノ再閲ヲ經テ政府ニ提出シタリ、

第十三 入獄ヲ免レタル人士ト板垣氏拘引ノ

覚悟

附タリ林・大江二氏ニ対シ在獄中政府特殊ノ取扱並ニ林氏ト岩崎彌太郎氏ト、政治上ノ大

活躍ノ盟約及ヒ黒田首相カ林氏ニ密語ノ事情

一蓋世ノ英雄西郷氏ヲ首メ、天下ノ猛將桐野・村田・逸見、別府ノ諸豪、屍ヲ城山ニ曝スヤ(西郷氏ハ三月上旬斃没シタリ)西南ノ兵乱ニ関繫アリシ天下ノ志士ハ、多クハ縲紲ノ辱メヲ受ケタルヨリ、土佐拳兵党モ復タ其厄ヲ免レス、之レカ為メ谷重喜・片岡健吉・山田平左衛門・池田應助・林有造・岩崎長明・岡本健三郎・大江卓・竹内綱(元六等出)・中村貫一・岩神昂・水野寅次郎(水野氏ハ新町組ト称スル共行社ノ主領ニシテ同社内藤・村松二氏ノ拘引ニ関リタルモノ)・桑原平八・佐田家親等ノ諸氏ヲ始メ、彼是式拾余名ノ人員、幽囚ノ災厄ト為ルモ、中ニハ意外ノ人士モ捕ハレ、本人モ意外トシ、同志者モ之ヲ意想外トシタル者甚タ多シ、即チ前野寅太郎・弘田仲武・野崎正朝・小笠原某ヨリ三浦父子ノ諸氏等ナリトス、而ルニ當時ニ於テ最モ機密ニ参画シタル連中ニ対シ、之ヲ不問ニ附セラレタル者アルト、板垣・後藤両氏ノ身上ニ就キ、一回タモ臨時裁判所判官即チ玉乃大判事ヲシテ林・片岡・大江・池田・山田氏等ニ対シ、一言半句両氏ニ及ハサリシハ、在獄者一同ノ齊シク不思議ニ感シタル処ナリキ、蓋シ政府ハ特ニ意ヲ用ヒテ、這ノ訊問ヲ避ケタルナランカト思ハル点モ之レアリトス、

但シ谷・片岡・林・池田・岩崎・大江・岡本・竹内・中村・岩神等ノ諸氏カ相前後シテ高知又ハ東京・大坂等ニ於テ陸統捕縛セラレタル後、一夜高知ニ於テ第二回ノ拘引者アルトノ訛言アルニ際シ、板垣氏ハ輕装シテ立志社ニ来ラレ、本夜ハ自分モ累ヲ免レサルベシト言ヒ、手鞆ヲ携ヘ領袖社員ノ少数カ集會シタル席上ニ見ヘタル事アリタルモ、遂ニ何等ノ異事莫カリシナリ、

政府カ拾年ノ役ニ於ケル困事犯罪者中、土佐人士ニ對スル措置、即チ取扱振リハ誠ニ異様ナル処アリトセリ、今其例ヲ挙クレハ、林・大江両氏カ岩手県監獄ヨリ仮出獄ヲ以テ東京ニ二十日間(二十日ノ滞在ヲ允セシモ例外ナリ)内外滞在ノ時ニ於テ、当路ノ大臣・顯官等ハ竊カニ両氏ヲ官邸又ハ私邸ニ招致シ、八年間在獄中ノ辛酸ヲ慰藉シ、且ツ頻リニ時局談ヲ為シタル等ノ如キハ、寔トニ異數ノ事ナリトス(當時陸奥宗光氏ハ既出ニ就官シ、伊藤ナリト)、又岩手県令石井省一郎氏ハ、両氏カ出獄ノ当夜、某旗亭ニ於テ盛宴ヲ開キ、其出獄ヲ祝シ幽囚中ノ苦楚ヲ慰メタリ、

但シ当年ノ困事犯罪者ノ禁獄ニハ可成面識ナキ者、

又ハ年數ノ相異ナル者等ヲ以テ、全一監獄ニ投シタル事ハアリシモ、其最モ重罪ノ刑辟即チ十年ノ禁獄ニ処セラレタル林・大江両氏ノ而カモ郷里ヲ全フスル者ニ對シ全獄全居ヲ允シタル如キモ、亦タ不思議ノ恩典ナリト思ヘルナリ、

亦タ林・大江二氏ニ對シ、政府カ特殊ノ注意ト取計ヲ為シタル一事アリ、斯ハ両氏^(岩村氏ハ林氏ノ実兄ニシテ當時司法大輔ノ現職中トス)ニ内命ヲ含マセテ両氏ヲ見舞ハシメ、秘密ノ協議ヲ為サシメタル事アリトス、蓋シ如斯ハ未曾有ノ事例ニシテ、而シテ亦タ明言スヘキニ非ラサレハ即チ之ヲ略ス、

^(佐)土佐人ノ在獄者中ニ林直庸・藤好靜・村松政克ノ三氏アリシモ、村松氏ハ不幸疾ニ罹リ獄中ニ死セリ、而ルニ村松・藤ノ二氏ハ拾年ノ戦役中、池田應助氏ノ書東ヲ携ヘ、桐野利秋氏ノ陣營ヲ訪ヒタル事アリ、這ハ先年、池田氏カ桐野氏ノ熊本鎮台司令官在職中頗ル信任ヲ得、其參謀長タリシヨリ其交誼殊別ナルヲ以テ、其秘書ヲ携ヘ九州ニ趨キタル事実ナリ、然ルニ薩兵ノ死傷者ノ懷中ニ、土佐トノ聯絡不日行ハルヘキ実証ハ、池田氏ノ秘東ヲ携ヘ村松・藤二人カ

桐野氏ノ陣營ニ來タル記事アリテ、薩兵ヲ激励セシメタル事ヲ官軍ニ於テ之ヲ發見シタルヨリ、土佐人士中、第一番ノ拘引者ハ即チ村松・藤ノ二氏ナリトス、而シテ林氏ノ行動ハ所謂獅子身中ノ虫ニシテ、政府並ニ我々旧同志者ヲ始メ、世人ニ於テモ周知ノ事情アルヲ以テ、予ハ今之ヲ往時ニ溯リ記述スルニ忍ヒサルナリ、

林氏ノ仮出獄ヲ以テ帰省ノ途次、東京ニ滞在中、岩崎彌太郎氏ハ（林氏カ岩崎氏ト交際ノ深厚ナリシハ、明治ノ初年、林氏高知藩大參事在職中、板垣氏ト相謀リ、旧藩主山内容堂公ノ裁可ヲ得テ、藩有ノ汽船數隻ヲ拳ケ、僉ナ廉価ヲ以テ払下ケ、土左ト上國トノ航通ヲ敏括ナラシメ、国産物ノ販売ヲ拡張シ、將ツテ藩國ノ財政ヲ伸張円滑ナラシメタル等ハ、実ニ後年岩崎家カ天下一大富豪ノ基礎ヲ開始シタル最大素因ナリトス、是故ニ岩崎氏ハ林氏ニ対シ、在世中ハ浅カラサル歎待ヲ為シツ、アリ、現ニ仮出獄ノ砌モ、直チニ旅費トシテ多額ノ金目ヲ密贈シ來レル事アリタルハ、仮出獄ノ際ニ予ハ板垣氏ノ密旨ヲ帶ヒ、林・大江両氏ノ入京前ニ之ヲ伝示スル一事アリシヨ

リ、奥州石ノ巻ニ迎ヘタリ、而シテ大江氏ハ海路入京シ、林氏ハ予ト全行陸路入京シタルヲ以テ能ク之ヲ記臆^(應)セリ、然ルニ林・大江二氏等ハ当年ノ自由党ヲ解散シ、更ニ捲土重来ノ大企圖ヲ緊切ナリト思惟シ、之ヲ為スニハ各派ヲ糾合シ、一旦天下ノ大合同ヲ謀ラシメントシ、入京ノ上竊カニ板垣氏ヲ勸説シ、

遂ニ其実現ニ至ラシメ、乃チ後藤氏カ擁セラレテ、彼ノ大同団結ノ大傘下ノ裡ニ、天下ノ志士即チ各種ノ政派ヲ合同セシメタルハ、実ニ林・大江両氏カ、岩手県監獄署ヨリ仮出獄ヲ以テ上京ノ際、之ヲ画策シタルモノナルニ付、爰ニ之ヲ附記ス、但シ後藤氏カ大同団結ノ主領ト為リ、天下ヲ周遊スル前ニ方リ、氏ハ竊カニ徳川慶喜公ヲ駿州沼津ニ訪ヒ拜謁シ、彼ノ大政返上ノ為メ旧主老侯ノ意衷ヲ上陳シタル事跡ヨリ遷都ノ断行、封土ノ奉還、統ヒテ廢藩置縣等ノ大事業ヲ遂行シ、天下ノ公道ヲ行ヒ、今后ハ益々公義輿論ヲ拡張シ、国政ヲ振起スルニハ、天下ノ有志ヲ翕合シテ邦家ノ為メ、一意身ヲ効サント欲スル旨ヲ拝陳シ公ノ贊襄ヲ第一ニ得テ、然后其奔走ヲ開始シタル事ノ如キハ、頗ル當時ニ於テハ意義アル事情

ナリトス）一夜竊カニ林氏ヲ招致シ、互ニ久闊ヲ叙
ヘ各種ノ談話ヲ交換シタル后、彌太郎氏ハ林氏ニ対
シ徐ロニ語りテ曰ク、余カ創設シタル海運ノ大事業
ハ、全ク其目的ヲ達成シタリ、今後ハ最早守成ニ属
スルヲ以テ、愚弟彌之助ヲ以テ之ヲ監督セシメナバ
不可ナシトス、而ルニ自分ハ未タ老境ニ入タル年齢
ニモアラスト認ムル而已ナラス、一家ノ事業達成シ
タルヲ以テ之ヲ安ンシ、将来唯風月ヲ友トシ、閑日
月ヲ貪ラント欲スル意志ハ之レ莫キナリ、而シテ足
下ノ拾年ニ於ケル志業ハ、竟ニ其目的ヲ達セスシテ
不幸中道ニシテ頓挫シタリ、其胸中亦タ諒察スヘキ
処歟シトセサルナリ、乍去男子一旦志ヲ立ツ、其目
的ヲ貫カスシテ此儘身ヲ終フルハ、足下ノ素志ニモ
アラサルヘシ、余思フニ、男子志業ノ活躍ハ矢張天
下ノ國家ノ事ニアルヘキト認ムルヲ以テ、自今足下ニ
於テ、依然天下ノ國家ノ事ニ就キ、益々勇往尽瘁ノ壮
図ヲ棄テスンハ、余ハ今後、成敗利鈍ハ顧慮セス、
足下ト相提掣シ、大ニ天下ノ國家ノ事ニ奮闘画策致度
モノト思惟セルナリ、勿論将来ノ奔走奮闘ニ要スル
一切ノ費用ハ如何ニ巨莫ヲ告クルトモ、余常人ニテ

之ヲ負担シ、天下ニ対シ是レヨリ大芝居ヲ打チ出タ
シ「ワルサ」（是レハ政治上ノ「ワルサ」所謂イタヅラヲ為サントスル
事ニテ即チ一政府ヲ首メ國民ノ耳目ヲ驚動セシメント
シタル意）ヲ為サハ、天下ノ快事はレニ過キサルヘシ、
然ルニ今這ノ事ヲ為サントス、滿天下只單り足下ノ
外、真ニ其胸襟ヲ披瀝シ相俱ニ謀ラントスル人物ハ
一人モ無之トス、足下ノ意志如何哉トノコトナリシ
カバ、林氏モ岩崎氏決心ノ鞏固ナルト、一家ノ大事
業ヲ実弟彌之助氏ニ委任シ、前途大ニ國家ニ尽瘁
勵セント欲スル豪懷活躍ノ壮拳ヲ打チ明ケ、親シク
其胸中ヲ吐露シタルハ、流石ニ彌太郎氏ハ非凡ノ人
傑ニシテ、天下ノ富貴ニ安逸セス、更ニ邦家ノ前途
ニ着眼シタル処ニ一入感激シタリト云フ、而ルニ林
氏ハ未タ仮出獄中ニ付、刑期（十ヶ年ノ禁獄中八年ニテ仮出獄
ト為リタルヲ以テ殘余式ヶ年内
外ニテ開滿）ノ畢フルヲ俟チ、必ス相提掣シテ再ヒ天下
ノ國家ノ事ニ奔走スヘキヲ誓ヒタリシモ、不幸ニシテ
岩崎氏ハ翌十八年ノ春病魔ニ冒カサレ、不帰ノ客ト
為リシハ、実ニ兩氏ノ為メ不幸トシ、亦タ天下ノ國家
ノ為メ不幸ト謂フヘキナリ、這ノ兩雄ノ密謀企画ハ、
今日ニ至ルモ殆ント知ル者甚タ稀レナリトス、儼シ
モ岩崎氏ニシテ、仍ホ數年間生存セル時ハ、必ス兩

氏ノ提擧ヲ以テ、政海ノ大活躍ヲ為シ、両氏ノ豪氣ト岩崎氏ノ金力ヲ以テ、天下ニ呼号セハ、如何ニ政海ノ發展ヲ為シタルカ測リ知ルヘカヲサルモノニシテ、恐クハ現今ノ如キ政党政派ノ情態ニハ止ラスシテ、必ス非常ノ變遷ヲ為シ、朝野人心ノ掃趨方向ヲ革新激變シタルナラン、

又林氏ノ朝野ノ間ニ重ンセラレタル其一例ヲ挙げクレハ、黒田伯内閣ノ時代ニ於テ、林氏ハ政府ニ対シ頗ル熱烈ナル建白ヲ為シタル事アリ、其際一夜伯ヨリ三田私邸ニ枉駕ノ案内ヲ受ケタルヨリ、車ヲ馳セ之ニ趨キタルニ、主人ノ外ニ松方・大山両伯ハ相客ト

シテ臨席シタリキ（林氏ト大山氏ト、明治ノ初年普仏大戦争ノ際、
薩州ヨリ大山氏、長州ヨリ品川弥二郎氏、肥前
ヨリ池田弥一氏、土州ヨリ林氏ノ四氏カ官命ヲ以テ、軍事視察トシテ出張シ
タル旧交アリタリ、又松方氏ハ黒田氏ノ隣郡ニシテ、林氏トハ相識ノ事ヲ
シテ以テ、特ニ相客ト）、然ルニ黒田伯ノ酒癖アル事ハ、現

ニ往年、濱御殿即チ延遠館ニテ、諸大官連ノ大宴会開催ノ節林氏ノ実兄岩村通俊氏ト黒田氏トノ大拳闘、大搏撃ノ末、尚ホ互ニ椅子ノ打チ合ヲ演シタル事アリシカ、両氏ノ腕力強大ト其勢威ニ怖レ、誰レ老人之ヲ仲裁スル者莫カリシヨリ、腕力ノ強大復タ黒田・岩村二氏ニ劣ラサル渡邊昇氏之ヲ危フミ、身ヲ挺シ

テ両氏格闘ノ間ニ躍入り、漸ク之ヲ引分ケタリシ事
 在ルヲ以テ、当夜ノ席上、建言書提出ノ昨今ナラバ、
 饜宴ヲ受ケナカラ時局談ニ渉ル際、伯ノ意見ト衝突
 ノ事アラバ、必ス搏撃ニ遭フナラント覚悟シ、苟ク
 モ果シテ其妄状ニ迫ヒナバ、決シテ返擊復搏ヲ辞セ
 サル積リニテ、黒田邸ニ抵リタレハ、頗ル鄭重ナル

饜應ヲ受ケ、頻リニ其數盃ヲ傾ケ、且ツ時事談ニ時
 ヲ耽シタル内、黒田伯ハ林氏ニ対シ過日貴下ノ建言
 書ヲ披閱シ、貴意ノ在ル処ハ余能ク了承シタリ、惜
 ヒ哉、該建白書ヲシテ小牧ニ（藏人ニテ大学者、且ツ文章家）
 筆ヲ執ラシメナハ、一層其意義ニ光彩ヲ放チシナラ
 ント言ヒテ、意外ニ慇懃且ツ歎待厚クシテ、何等ノ
 異事ナカリシナリ、而シテ伯ハ左右ニ在ル松方・大
 山両伯ヲ顧ミ、林君ノ建白書ハ両君一読シタルカト
 ノ間ニ対シ、両氏未タ一読セサルナリト云ヘハ、伯
 ハ両氏ニ向ヒ、林君ノ如キ多年天下ノ事ニ任シ、日夜
 奔走セル名士ノ政府ニ提出シタル建言書ヲ國務大臣
 タル二君カ未タ一誦セサルトハ何タル次第ナル哉、
 至急内閣ヨリ取寄セ一覽シ、林君ノ意志ノ在ル所ヲ
 知悉シ置カレヨトノ忠告ヲ為シタリト云フ、林氏ハ

最早時事談モ大半尽キシ潮合ヲ考ヘ、厚ク饗宴ノ礼ヲ謝シ、黒田邸ヲ辞スルニ莅ミ、伯ハ左右並ニ近侍ノ者ヲ退ケ、伯耆人ニテ玄関迄見送り来リタル際、

林氏ノ頸ニ卒然手ヲ伸ハシ、之ヲ引キ寄せ竊カニ声

ヲ低フシ、耳語シテ曰ク、林君ヨ、現政府ノ顛覆ハ

未タ早キト思惟セルヲ以テ、今姑ラク之ヲ俟テトノ

一言ヲ密語シ、互ニ礼ヲ厚フシ相分レタリト云フ、

是レモ復タ一奇談ニシテ、林氏カ居恒権勢家ニ重視

セラレタル一斑ヲ窺フニ足ルヘキナリ、

本文黒田伯ト会見ノ事ハ土左拳兵ノ事ニ関係ナキモ、

林氏カ近年政界隱退ノ后ハ世人ニ忘レラレタル感アル

モ、一時天下ニ声誉ヲ博シタル俊傑タルトテ、今ニ至

ルモ竊カニ天下ノ有志ハ氏ノ再起ヲ切望スルモノト、

之ヲ景慕スル族甚タ尠少ナラサル処アルカ如シ、乍序

爰ニ附記シ置ケリ、

第十四 中岡・大三輪両氏ノ任俠

一近衛兵又ハ各社壯士ノ内ニ列セサル中岡正十郎・大三

輪長兵衛(奈良太郎氏ノ実父)ニ氏モ、捕縛ノ難ヲ免レタルハ亦タ

奇トスル処ナリ、中岡氏ハ立志社員ニシテ、火薬商ニ

テ、第八十国立銀行ノ支配人タリシカ、林氏ノ委囑ヲ

受ケ、大坂ヨリ鉛五万斤、火薬数千斤等、拳兵用ノ

為メ輸入ノ事ヲ担当シ、其他秘密ノ奔走復タ鮮シトセ

ス、大三輪氏(福岡県人ニテ、第五十八国立銀行重役ヲ以テ高知出張所ノ長タリ)モ竊カニ林氏

ノ委托ニ依リ、拳兵党ノ為メ間接ノ尽瘁勦カラサリシ

ナリ、故ニ這二氏ノ行動ハ、恰カモ元禄年間赤穂義士復

讎ノ拳ニ際シ、天河屋義兵衛カ義俠ニ等シキ感アリト

ス、又タ薩軍ノ蹙マル、ヤ、五万斤ノ鉛ヲ夜半三更、

立志社ノ倉庫ヨリ本社ノ床下数尺ヲ掘リ、十日間程毎

夜拾人宛輪番ヲ以テ之ヲ隱匿シタルハ、皆多ク機密ニ

参加ノ諸士ト、其秘密ヲ認知シ居ル四五ノ旧近衛兵ノ

將校ニテ、即チ東野行孝・谷重中(重喜氏三弟ニシテ二氏共近衛兵中尉)・篠原

總作・橋田正隆・前田正澄・山田清躬(四氏共元近衛歩兵少尉)ノ諸氏

ナリトス、

但シ潮江村字西孕ニ中岡正十郎氏ノ火薬庫アリ、今

所ニハ夥多ノ彈藥ヲ貯蔵シアリシヨリ、一時竊カニ

之ヲ他所ニ移シ、各方面ニ分配ノ議モ起リシカ、事

ノ露頭セン事ヲ虞ルト、且ツ上海ヨリ独銃ノ来着セ

ル遠キニアラサルヲ以テ、到底無用ニ属スルトノ事

ヲ以テ之ヲ中止シタリ、然ルニ数日ノ后、県庁ハ警

察官ヲ派シテ悉ク之ヲ倉庫ヨリ取出シ、大坂城ニ転

送シ、遽カニ衛兵ヲ附シタリト云フ、復タ當時高知ニ歩兵一大隊來県シテ警備シタリ、

第十五 弘瀬氏ノ雪冤

一立志社員ノ領袖ニシテ、當時高知県庁警察課長タル弘瀬新一氏ナル者アリ、意気豪放島本仲道氏(元司法大丞)ノ知遇ヲ受ケ、法律ニ精通シ居タルヨリ立志社法律研究所ニ聘セラレタリ、尔后時ノ県令小池國武氏ノ為メニ擢ラレ、庶務課長兼警察課長タリシカ、平生忌憚ナク侃諤ノ言ヲ発スルヲ以テ、立志社領袖ノ間ニ相容レサルモノアリ、征薩ノ役起ルヤ、弘瀬氏ノ行動ヲ疑ヒ、秘密ヲ告ケサルヨリ、何トナク双方疎隔ノ情ヲ起シタリ、或ル日元老院議官佐々木高行・中島信行両氏ノ高知ニ歸レル事アルヤ、弘瀬氏ハ中島議官ヲ訪ヒ、頻リニ其不平ヲ鳴ラシタル事アルヲ、予ハ中島氏ヨリ伝承シ、其胸中ヲ察シ、之ヲ慰藉シ略ホ當時ノ概況ヲ語りタル事アリ、而シテ弘瀬氏ハ官命ヲ以テ京都ニ上ルヤ、一日大久保内務卿ニ面謁シタル際、卿ハ頻リニ土佐ノ動靜ニ就キ、日夕訛言浮説ヲ耳ニスルモ、板垣君ノ在ルアレハ、余ハ安シシテ其流ニ惑ハサルナリト一言ヲ發シ、暗ニ土佐ノ事情ヲ探リ、亦タ弘瀬氏ノ行動ヲ視

ルノ傾キアルヲ以テ、氏ハ其訛言ニ過キサルヲ弁シタレハ、恐クハ内務卿モ疑心ハ積ケタル様思考スル旨、帰県ノ翌日板垣氏ニ対シ其事情ヲ陳述セル砌、席ヲ空フシテ予ハ之ヲ聞ケリ、但シ予カ当日板垣氏ヲ訪ヒタルハ、県庁ニ対シ護郷兵團結ノ趣意書ヲ草シ、板翁ノ展閱ヲ乞フカ為ナリ(名ヲ護郷ニ藉リ、公然兵備ヲ為シ、其整頓ヲ待ツテ猛然黨起ノ予図ナリトス)、蓋シ該趣意書ハ板垣氏ノ意見ニ出ツルモノトス、而ルニ予ハ護郷兵編成ノ事タル、地方官ノ許否スル処ニアラスト思ヘルハ、明治七年日清ノ葛藤生スルヤ、立志社ニ於テハ板垣氏ノ首唱ヲ以テ、寸志兵編成ヲ為シ、外難ニ当ラント欲シ、之ヲ陸軍省ニ提出シタル際、予ハ其趣意書ヲ草シタルモ、陸軍省ハ之ヲ採用セサリシ事アルヲ以テ、這般ノ護郷兵編成ノ事タル、亦タ陸軍省ニ提出スヘキモノト考ヘタリ、然ルニ之ヲ地方庁ニ提出シタルヲ以テ、治安ニ害アリトシテ果シテ許可ヲ得サルナリ、但シ当今ノ形勢タル假令ヒ陸軍省ニ提出スルモ、其目的ハ到底達成セサル可シ、

但シ弘瀬氏ノ行動ニ就テハ、兎角同志者間ニ於テ之ヲ論議スル者有リシモ、斯ハ全く冤枉ニシテ、弘瀬氏カ佐々木議官トハ面会ヲ避ケ、中島議官ヲ誘ヒ(佐々木氏)

ハ純粋ノ政府党タルモ中島氏ハ反政府党ニ氣給ヲ通シタル傾キアリ、小舟ヲ孕附近ノ内海ニ浮

へ、互ニ打解ケ時局談ヲ為シタル事ニ就キテモ、當時ノ事情トシテ同氏ノ胸中決シテ不審ノ点ハ之レ莫ク、却テ這ノ責メハ立志社領袖連ノ内ヨリ之ヲ疎隔シタル結果ナリトス、今亦タ其証左ヲ挙クレハ、弘瀬氏ハ警察課長ノ要職ニ在ルヲ以テ、当年ノ時局ニ就キ、政府へ県下ノ動靜ヲ事実通り報告具申ヲ為セバ、疾ク土佐ハ忽チ紛擾ノ巷ニ陥リシナラン、殊ニ弘瀬氏ノ麾下ニハ、立志社員即チ拳兵党ヨリ警察官ヲ奉職シタル森脇直樹・一圓正興・伊東物部・新階武雄氏等ノ如キハ、当時最モ有力ナル幹部ノ警部タリシナリ、況ンヤ警察官ノ過半数ハ立志社員即チ旧近衛兵在役ノ兵士ナルニ於テヲヤ、

大江氏モ一日弘瀬氏ト会晤スルヤ、弘瀬氏ハ立志社ノ領袖ニ疎外セラル、ヲ以テ、内心頗ル不平ヲ鳴ラシタルヨリ、大江氏モ其胸中ヲ諒察シ、竊カニ拳兵ノ顛末一切ヲ洩ラセシニ、弘瀬氏ハ沈思ノ後不賛成ヲ唱ヘタリト云フ、乍去僕モ男子ナリ、諸君ノ壮拳ハ決シテ他言セサルニ付安心セヨトノ一語ヲ以テ相分レタリト云フ、而ルニ弘瀬氏ハ大久保内務卿ニ対シ、白髮山森林

ノ払戻ノ金額ヲ立志社ニ交付シテハ宜シカラサルヲ縷陳シタル旨、大江氏ニ語りタル由ナリ、乍去当年同氏ノ職責上、土左ノ行動ニハ無限ノ痛苦ヲ感シタリシナラント察識スヘキナリ、

第十六 谷將軍帰省ノ上旧友へ対シ復職就官ノ勸告

一已ニシテ陸軍少將谷干城氏熊本ニ籠城シテ、薩ノ勇將驍兵ヲシテ其攻略ノ志ヲ逞フセシメサルノ戦功ヲ以テ、翌十一年盛夏ノ交、政府ハ之ニ教句ノ慰勞休暇ヲ与ヘテ高知ニ帰省セシメタリ、因テ板垣氏ヲ始メ旧友諸氏トノ会见ヲ求メタルヲ以テ、常盤町水野重規氏(元近衛歩兵大尉)ノ邸ニ於テ、板垣氏並ニ平尾喜壽・金子宅利・小谷正元・島地正存・廣瀬爲興氏等五六名ニテ面会スルヤ、双方ヨリ戦後久瀾ノ挨拶ヲ終へ、戦事中彼我両軍ノ戦略ヨリ攻防ノ巧拙ヲ論シ談笑數時ノ後、將軍徐ロニ曰ク、自分ハ熊本籠城ノ微功ニ由レルモノナル乎、現政府ハ自分ノ意見ヲ採用シ、亦タ依頼セラレタル事モ鮮シトセサルナリ、然シテ惜ムヘキハ希世ノ人傑タル西郷ハ方向ヲ誤リ遂ニ瘞レ、木戸又病ニ斃レ、大久保モ兇刃ニ罹リ、今日ノ事タル朝野一致シテ官民軋轢ノ弊ヲ

避クルヲ以テ、最大ノ急務タル論ヲ竣タス、而シテ諸君ニ於テハ明治六年以來ノ関繫上、政府ニ対シ定メテ慷慨タラサルモノアラン、然リト雖トモ局面一變ノ今日旧來ノ感情ヲ固執セス、従前文武ノ官職ヲ奉セラレタル諸君ハ勿論、新タニ官職ヲ奉セントセラル、諸氏ハ、此際努メテ国家ノ為メ、復職就官ノ事ニ致サレ度、是レ自分カ第一板垣君ニ乞ヒ、且ツ会合諸君並ニ諸君ヲ介シ、諸君ノ同志者ノ為メニモ切ニ胸襟ヲ披瀝シ、御相談致ス所以ナリ云云ト、至極打チ解ケタル会谈協育ナリシモ、双方ノ視ル処未タ互ニ異ナル所アルヲ以テ、竟ニ這ノ妥協ハ調ハスシテ散会シタリ(是レヨリ板垣氏ト谷氏トハ益々円満ヲ欠)、蓋シ將軍ノ懇談ハ固ヨリ一個ノ意思ヨリ出タル精神ナランモ、復タ政府ノ委嘱ヲ含ミ、戦勝ノ勢力ヲ以テ土左ヲ纏メ順ハサン政略ヨリ出テタルモノト推察スルニ難カラス、

但シ谷・片岡・山田・池田・岩崎・林等ノ諸氏ハ、當時在獄中ニ付参会セサルナリ、是レヨリ先キ征韓論破裂后、近衛兵ノ瓦解スルヤ、山地元治・北村重頼・土屋可成(三氏共陸軍中佐)・吉松秀枝(陸軍少佐)氏等モ連訣、板垣氏ト相俱ニ一旦高知ニ歸臥シタルモ、尔后或ル

事情ノ為メ、板垣氏ト意見ヲ異ニシ、這ノ諸氏ハ再ヒ上京ノ上復職シタルヨリ、山地氏ハ征討軍ニ参加シ殊功アリ、吉松氏ハ小倉ノ分營兵ヲ率ヒ薩兵ト戰ノ末戦歿シ、北村・土屋氏等ハ他ノ方面へ出張シタリト云フ、

第十七 岩倉右府暗撃ノ一素因

一征韓論分裂ノ后、一夜(明治七年一月十五日)岩倉公ヲ、赤坂喰違ノ坂上ニ於テ暗殺セント欲シタル者ハ、咸ナ悉ク土左人ニシテ、其レハ征韓ノ実行ヲ妨害シタルハ、其責メ公ニ歸スヘシト為シ、憤恚ノ余マリ武市熊吉氏兄弟ヲ始メ、中山佐五郎・澤田勝彌太・岩田太郎・山崎喜久馬・中西要太・下村清馬氏等ノ面々ニシテ、固ヨリ不逞ノ行動ニシテ之ヲ国典ニ照ラシ仮借スヘキモノニアラサルモ復タ深ク其原因ヲ釋ヌレハ、単ニ当年ノ征韓論ニ対シ、岩倉右府カ三條首相ノ病中ニアルヲ奇貨トシ、一旦三條首相ヨリ奏聞ノ上決定セシ廟議ヲ翻ヘシテ、反对セシ一事ノミニ止マラス、徳川幕府傾覆ノ際、京都ノ小御所ニ於テ、彼ノ有名ナル王政復古ノ大号令ヲ、天下ニ煥発セントスル簾前會議ニ於テ、中山前大納言忠能卿カ聖旨ヲ奉シ、宣言シテ曰ク、徳

川慶喜已ニ政權ヲ 朝廷ニ返上シ、征夷將軍ノ職ヲ辭
退ニ及ヘルヲ以テ、今日 朝廷ニハ其旨ヲ聞召サレ、
爰ニ 王政復古ノ大典ヲ挙ケ、万古不祧ノ國是ヲ確定
シ玉フ、諸臣謹ンテ 聖旨ヲ体シ、公議ヲ尽クスヘシ
トノ事ナリキ、此時旧主山内容堂侯カ席ヲ進ミ、國是
大議定ノ席上ニ徳川内府ヲ参列セシメスシテ、九門ニ
ハ會・桑二藩ノ警衛ヲ解キ、薩・藝・越・越・土・尾
藩ノ兵ヲ以テ、遽カニ交代セシメ、陰險急劇ノ大会議
ヲ開クハ甚タ不祥ナリトシ、侃々諤々慶喜公ヲ擁護ス
ルヤ、岩倉卿ハ薩藩大久保氏ノ後楯ニ頼リ、慶喜公ノ
参列ヲ拒絶スルノ意見ヲ執リテ固ク讓ラス、列席ノ公
卿・諸侯並ニ諸藩ヨリ徴セラレタル諸士等甲論乙駁、
舌戰頗ル酣ナルノ時、岩倉卿ハ竊カニ七首ヲ懷ニシ、
旧主容堂侯ヲ刺サント準備シタルハ、今日天下周知ノ
事ナルモ、該危局ニ對シ、山内家ノ旧臣ハ僉ナ挙ケテ
藩主ノ心事ヲ識察シ、岩倉卿ノ所為ヲ憎惡激憤スル事、
實ニ深大ナリトス、現ニ喰違ノ慘劇ヲ演シタル諸氏ノ
如キハ、亦タ最モ憤懣切齒ノ人々ナルヲ以テ、積怨併
発遂ニ此挙ニ出テタルヲ知ル、予ハ右ノ諸氏ノ中辱交
ノ族モ少ナカラス、爰ニ往時ヲ追懷シテ軫々感慨無量

ニ任ヘサルナリ、

或ル土左人士ハ謂フ、小御所會議ニ於テ 王政復古ノ
煥發ニ際シ、旧主老侯カ侃諤ノ提言ニ對シ、岩倉卿ヲ
首メ大久保氏等ノ殊更之ニ反對セシモ、當時ノ時局ニ
照サハ、旧主ノ此言議タル實ニ穩健至極ノ公論ナルモ、
薩長ハ一意自己ノ兵力ニ頼リ干戈ヲ以テ、幕府ヲ覆滅
セントスルノ大志(實ハ慶長五年關原ノ敗戦ヲ武百六十七年ノ後ナル慶
應三年迄臥薪ノ思ヒヲ爲シ、此機會ニ乘シ漸ク復讐
セントシタル其敵愾ノ意氣ハ)空シク面餅ニ帰セシメタレハ、彼
等ノ心情甚タ慊焉タラサルモノアリシヨリ、尔来土左
人士ヲ疎外セント云フ、蓋シ或ハ然ルヤ否ヤ、後世史
家ノ公論ヲ俟チテ然後定ラルル処アルヘシ、

第十八 島津久光侯ノ建言ニ基キ西郷氏北海道

へ隱退ノ冀望、板垣氏ノ激勵抑止並ニ
両氏三提掣ノ終始ト板垣氏英主山内老
侯ノ為メ屠腹ヲ免レタル事情

一是レヨリ先キ、明治五年 陛下ノ西海ヲ巡幸シ竜駕ヲ
鹿兒島ニ駐メ玉ヘルヤ、島津久光公カ廟謨ノ一二泰西
ノ文物制度ヲ模倣スルヲ憤リ、其此ニ至リシハ、畢竟
スル所、滿朝ノ功臣猥リニ西洋ノ制度ヲ羨慕シ、我國
情ヲ無視シテ旧主ヲ輕蔑スルニ出ツルモノト為シ、身

ハ鹿兒島ニ蟄居シナカラ満腹ノ不平ヲ抱キ、白眼一世ヲ睥睨シ、殊ニ薩藩置県ノ革新ハ、久光公ヲシテ最モ憤懣スル処ナリ、然レトモ政府ハ彼ノ如キ有力ノ旧藩主ヲシテ、徒ラニ反政府ノ思想ヲ増長セシムルヲ以テ尤モ不得策ト為シ、屢次之ヲ東京ニ招致スルモ敢テ応セス、時偶々 聖上ノ御巡視ヲ機トシ、拾有四五ヶ条ノ意見書ヲ 上奏シ、尚ホ事情ヲ徳大寺宮内卿ニ細陳シテ曰ク、西郷・大久保等ノ旧臣ヲ悉ク要路ヨリ貶黜セン事ヲ求メ、仍ホ又親近ノ土海江田信義氏ヲ上京セシメ、頻リニ新政反対ニ尽瘁セシメタリ、公ノ此意見タル固ヨリ時運ノ推移ニ併ハサルモノトハ雖トモ、旧恩ヲ重ンスル西郷氏ノ心事、実ニ苦痛苦悶ニ耐ヘサル処ナリ、是ニ於テ乎、五年八月遙カニ書ヲ倫敦ニ在リシ大久保氏ニ寄セテ曰ク、副城公(久光公ノ事)ノ 陛下ニ建白セラレタルハ意外ノ事ニシテ、足下及ヒ小生等ヲ弾劾シ、就中小生ヲバ重罪ト為シ、若シ此輩等ヲ罪セスンバ 上命奉シ難シト云フニ在リ、事頗ル急矣、足下速カニ帰朝シ、海江田一輩ノ頑論ヲ制セン事ヲト、然ルニ西郷氏斯ル苦境ニ立チシヨリ速カニ退職スヘントモ思ヒシガ、偶々黒田氏ノ勸ムル所ニ依リ、北海道ニ

退隱スヘシト考慮セル折柄、山城屋和助ノ陸軍省ニテ自刃、三谷三九郎ノ破産ヨリ、廟堂大官ノ醜聞世上ニ伝ハリケレハ、板垣氏ハ深ク時世ノ非ヲ慨歎シ、一日西郷氏ヲ訪ヒ親シク善後ノ策ヲ講シタレハ、西郷氏曰ク、足下ノ論スル処洵ニ良シ、然レトモ僕ハ時世ニ遅クレ当世ニ益ナシ、因ツテ辞職退官ノ上北海ニ入ラント欲シタリト云ヘハ、板垣氏襟ヲ正フシテ大ニ其不可ヲ争ヒテ曰ク、抑モ我々同志者カ粉骨碎身終ニ維新ノ宏業ヲ挙ケタル所以ノモノハ、幕府宿昔ノ弊政ヲ矯正シ、天祖肇造ノ国家ヲシテ泰山ノ安キニ置キ、以テ海外諸国ニ対峙セント欲スルニ非スヤ、今若シ我々ニシテ縦マ、ニ朝ヲ去リ、国政未タ全ク挙ラサルニ、之ヲ奸臣汚吏ノ手ニ委シ、以テ社稷ノ存亡ヲ度外視スルアラハ、何ノ顔セアリテ地下ノ同志ニ見ユルコトヲ得ン哉ト、西郷氏之ヲ聞キ、感激甚シク顔面忽チ朱ヲ漲ラシ満身肉ヲ躍ラシ、突如大声ヲ発シテ曰ク、足下ノ言実ニ然リ、請フ、是レヨリ必ス力ヲ戮ハセ、万艱ヲ排シテ以テ宿念ヲ貫カント、乃チ隣邸ニ寓セル伊地知氏ニ面シテ其志ヲ告ケ、断然留職シ、時ノ来タルヲ俟チタリト云フ、是レ則チ西・板両氏カ征韓論ノ主張ヲ同

フシタル所以ノモノ、蓋シ愛ニ職由スト云フ、越ヘテ六年征韓ノ論起ル、恰カモ好シ、日本帝國ノ現在暨ヒ将来ヲ深ク考慮シ、千載ノ一遇タル好機會ヲ以テスル國權ノ伸張、領土ノ拡張ハ、西郷氏宿昔ノ理想トセル処ニシテ、想フニ韓半島ノ事タル、地理上歴史上將タ国防上一日モ忽諸ニ付スヘカラサル所タリ、故ニ極南(海台)・極北(天樞)ノ諸問題ヨリモ、最モ第一ニ之ヲ解決セサルヘカラサルハ謂フヲ須タス、西郷氏夙トニ此ニ見ル有リ、今ヤ之ヲ以テ己レノ任ト為シ深ク板垣氏ト結托シ、廟堂ニ論争シ自ラ遣韓大使ト為リ、一身ヲ犠牲ニ供シ將ツテ出師ノ端ヲ開カントハ欲セシナリ、是故ニ拾又七八ノ秘書ヲ板垣氏ニ寄セ、廟議論争中頻リニ其衷情ヲ吐露シ、使節ノ任命ノ斡旋ヲ懇囑シ來レルモノ、実ニ相知ルノ深キ所以ニシテ、其交リ刎頸モ啻ナラサルヲ知ルヘシ、

又其後進ノ輩タル黒田・桐野ノ諸豪ヲシテ西郷氏ノ渡韓ヲ危惧スル事アリシモ、大ニ之ヲ叱斥(責)シテ、再ヒ其口ヲ開カシメスト云フニ視ルモ故アルナリ、復タ且ツ西・板二氏提挈ノ由来タル、最初ニハ維新ノ前京都ニ於テ竊カニ両氏ハ天下ニ先タチ、討幕ノ密議ヲ擬ラシ、

板垣氏ノ率ヒ扶ケタル水戸ノ浪士中村勇吉・相良總藏・里見某其他數十名ヲ西郷氏ニ托シテ三田ノ薩邸ニ潛匿セシメ、以テ討幕ノ導火ト為シ(板垣氏カ岡田ノ徒ヲ扶助セシ目的タル西郷氏ト京都ニ端ヲ発スルノ日、同時ニ彼等ヲ驅ツテ武總ノ野ニ事ヲ起サシメ、以テ東西策応、幕府ヲシテ顧慮ノ患ヲ作ラシメント欲セシニアリキ、而シテ慶應三年幕府ハ巡邏ノ兵ヲ以テ、三田ノ薩邸ニ潛メル岡田・里見ノ同志相良(岡田・里見等ハ薩邸ニ既ニ潜伏スル者ナリ)等ノ浪士數拾名ヲ捕ヘントシ、之ヲ燒撃シタルヨリ、翌四年正月三日遂ニ伏見・鳥羽ノ戦端ヲ開始シタル因由ナリトス、今少シク其事情ヲ詳記センニ、初メ板垣氏ノ西郷氏ト討幕ノ密議ヲ誓フヤ、(這ノ会合ニハ薩ヨリ吉井幸藏、土ヨリ谷干城・毛利恭助ノ三氏カ臨席シ、土藩ノ陸援隊長ノ石川清之助、本名中岡慎太郎氏(坂本龍馬ト相俣ニ誦教セラレタルト有名ナル人傑ナリ))ガ西郷氏ト板垣氏ヲ結び付ケタルモノトス)亦タ一事ノ心ニ関スルモノアリ、其ハ他ニアラス、板垣氏ノ江門ニ在ルノ日、筑波ノ殘党ナル水戸ノ浪士中村等外數拾名ヲ築地ノ土州別邸ニ隱匿シタリ、彼等皆豪放有為ノ士ナリトス、異日足下(西郷)等ト事ヲ京都ニ挙クレハ即チ彼等ヲシテ總武ノ間ニ起タシメ、

東西相呼応セハ洵ニ快絶ナラン、然レトモ独リ憂慮ニ耐ヘサルモノハ、江都ヲ辞スルニ臨ミ、之ヲ同志ノ山田(實久馬)・小笠原(吉)・眞邊(作戒)ノ青年ニ托セシモ、藩庁復タ佐幕派ノ勢力台頭ノ際ニ付、早晚艱難ヲ来タシ、必ス事ヲ誤ラン事ヲ虞カリ、痛心此上ナシ、是以テ何トカ尊藩ニ於テ中村等ノ浪士ヲ隱匿スルノ途ナキカト云ヘハ、西郷氏ハ忽チ之ヲ快諾シテ之ヲ安ンセヨ、直ニ人ヲ遣ハシ宜シク之ヲ処セント、後果シテ浪士ノ面々皆三田ノ薩邸ニ移リタリ、現ニ西郷氏ノ参議在職中閣議ノ終リシ後、雑談ニ涉リシ際、西郷氏ハ閣僚ニ談スラク、板垣氏ハ誠ニ恐ルヘキ人ナリト云ヘハ、他ノ閣僚ハ之ヲ不審ニ思ヒ、其ハ何ノ為ナル乎ト反問セハ、西郷氏之ニ答ヘテ曰ク、維新前板垣氏ハ水戸ノ浪士数十名ヲ余ニ昇キ込ミ、戊辰ノ活劇ヲ始メサセタリト言ヘハ、板垣氏モ直ニ笑ヲ含ンテ之ヲ弁シテ曰ク、其浪士ノ昇キ込ヲ為シタレハコソ、早ク幕開キハ行ハレタルモノニアラサル哉ト云ヘハ、西郷氏モ手ヲ打チ、一言ナシトテ呵々哄笑シ、満座ノ閣員ハ其意外ノ顛末ニ吃驚シタリト云フ、而シテ其浪士ナル者皆悉ク気豪羈スヘカラサル輩ニシテ、薩邸潜伏中屢々江

戸ノ市中ニ横行乱暴ヲ働キシヨリ、幕府ノ選兵ト衝突絶ヘサルヲ以テ、幕府モ大ニ之ヲ怒リ、終ニ庄内外三藩ノ兵ヲ督シ、薩邸ヲ焼撃シタリ、是レ則チ慶應三年十二月廿五日ニシテ窮隱僅カニ五日前ナリ、何ソ料ラン、此日ノ烟焰ハ夷ニ討幕開戦ノ第一烽ニテ、南風ノ競ヒ颯カル戊辰ノ戦端タル伏見・鳥羽ノ大活劇ヲ噴出スル前兆ナレハナリ、然ルニ板垣氏ノ浪士隱匿ノ事タル、土藩ノ佐幕派ハ荐リニ之ヲ奇貨トシ、百方厥ノ讒陥ヲ図リ、藩庁ヲ脅カシ、刃ヲ其腹中ニ刺メントセルモ、旧主山内老侯ニハ首テ這ノ事件ハ、疾ク板垣氏ヨリ竊カニ聴取默認シ居タル事ナルヲ以テ、老侯ノ英明群下ノ讒構ニハ毫モ耳ヲ傾ケサリシカ為メ、板垣氏ハ幸ニ無事タル事ヲ得タルナリ、儼シモ当年ノ時局ニ対シ尋常ノ君主ナラシメバ、佐幕党ノ勢力盛り返シノ際ニ処シテ、恐クハ群下ノ讒陥ニ誤ラレ、必ス希世ノ人傑モ喪ヒタリシモノナランモ、這ノ危機ヲ脱シタル板垣氏ハ、有繋ニ天下ニ威望アリ、且ツ平生板垣氏ヲ信愛セシ老侯ノ賜モノニシテ、是レ畢竟君臣ノ互ニ相許シ相信スルノ厚キヨリ出ツルモノニシテ、復タ実ニ老侯ハ近世ノ英主タル所

以ヨ癸セルモノト謂フヘキナリ、而シテ中途ニハ既述ノ如ク西郷氏ノ北海道ニ隱退ノ意志ヲ抑止シ、互ニ將來ノ進退ヲ誓矢シ、最后ニハ征韓ノ為メ相俱ニ邦家百年ノ大計ヲ建テ、身命ヲ顧ミサル事ノ如キハ、方今ノ為政家ガ術ハル、權略詐術ヲ是レ事トシ、以テ虚名ヲ博セント欲スルモノトハ、日ヲ同フシテ而シテ語ルヘカラサルモノナリ、

第十九 政府征臺ノ不成功並ニ西郷氏ノ炯眼

一明治六年冬拾月、内閣ノ瓦解後、政府ノ施設ハ兎角齟齬矛盾ト為リシヨリ、政府ノ政策トシテ海外ニ手ヲ出タシ、国内ニ充満セル不平ノ人氣ヲ外ニ向ケ、且ツ薩・土両州ノ征韓党將士ノ憤懣ヲ慰撫センカ為メ、臺灣蕃地ノ征討ヲ策スルヤ、長州出身ノ武官ハ政府ノ政策矛盾ヲ論難シ、山田(義顯)・鳥尾(小弥太)・三浦(梧)ノ諸將ハ、相率ヒテ木戸氏(木戸氏ハ征台ノ不可ヲ痛調辭職セリ)ニ(慎吾、從道) 亞ヒテ、其職ヲ辞セルモ、政府ハ其方針ヲ變セス、大西郷ノ実弟新吾將軍ヲ征臺ノ總督ニ、土州出身ノ谷干城將軍ヲ輔タラシメ、出師ノ準備完ク成リ、許多ノ汽船ハ長崎港ニ集シタリ、然ルニ政府ハ外人ノ提言ニ依リ、俄カニ征臺軍ヲ停止スルノ勅出テタルモ、出征ノ將士ハ命ヲ

奉セス、政府ニシテ強ヒテ出征ヲ抑止スルナラバ、全軍脱艦シテ出征スヘシト主張シ、遂ニ解纜シタリ、政府ノ失態実ニ甚シト謂フヘキナリ、而シテ征臺ノ兵士ハ三千六七百人ナルモ、薩州ヨリ從軍シタル者ハ僅カニ八百人、土左(佐)ハ征臺ニ反対ナルヲ以テ芘人モ從軍セス、征臺費ハ七百七拾壹万圓ナリト云フモ、清国ヨリ得タル償金ハ纔カニ六拾壹万圓ニ付、差引六百余万圓ヲ耗費シタル勘定ニテ、誠ニ国家ノ不成功此上莫カルヘシ、但シ政府ハ所陳ノ如ク海外ニ手ヲ出タシ、国内ニ充溢セル不平ノ人氣ヲ外ニ向ケ、薩・土ノ不平党ヲモ慰撫センカ為メ、強ヒテ征臺軍ヲ起シタル政策ナルカ如キモ、土左派ニ於テハ征韓論ト征臺論トハ、問題ノ輕重同日ノ論ニアラサルヲ識別シ居ルヲ以テ、征臺論ニ耳ヲ傾ケル者ハ芘人モ莫ク、復タ谷將軍ノ如キハ征韓論ニハ何等ノ關係ナキヲ以テ、全將軍ヲ征臺役ニ際シ西郷總督ニ輔タラシメタルモ、土左派ノ不平党ニハ毫モ慰撫策トハ為ラザリシナリ、而シテ大西郷氏ノ志ス目的ハ、職ハラ露国ニ対シテノ準備用意ニアレハ、当年ノ征韓論ニ反対セシ者ノ内ニハ征韓ヨリ延ヒテ露国トノ葛藤ヲ生セン事ヲ憂慮シタリト云フ者アル

モ、当時露国ノ国勢タル未タ我国ト干戈ニ愬フルカ如キ陸地政略ノ実力ハ決シテ備ハサリシナリ、乍去大西郷氏ハ遠ク前途ニ觀ル処アリテ、伊東・山本・上村・東郷等ノ諸氏カ、自己ノ意見ニ賛同スルヲ退ケ、前途海軍ニ志ヲ有スル青年学生等ハ孜孜勉強シテ、他日露国トノ戦役ニ際シ身ヲ効タスヘキ事ヲ激励セシ由ハ、流石ニ大西郷翁ノ炯眼ト為サ、ルヲ得ス、故ニ山本大將ヲ始メ、薩摩出身ノ海陸將帥ハ別シテ翁ヲ尊崇スルノ度ヲ加ヘタルト云フ、左モアルヘキ事ナリト思ヘルナリ、

今爰ニ筆ヲ擱クニ方リ、西郷・板垣両氏ノ性格言行ヲ欽慕スル為メ左ノ詩句ヲ掲ケ置ケリ、

西郷翁ノ詩

幾経辛酸志始堅 丈夫玉碎恥輒全

我家遣法人知否 不為兒孫買美田

板垣翁ノ警句

死 生 亦 大 矣

板垣氏カ終始一貫憂國ノ至誠ヨリ発生シタル言行ヲ、一々叙陳スレハ殆ント際限ナキモ、第一同氏ヲ首メ土佐派拳兵ノ目的モ復タ畢竟憂國ノ至情ニ出テタルモノ

ニシテ、決シテ自己ノ私忿ヲ逞フシ、野望ヲ遂ケント欲シタルモノニハアラサルナリ、現ニ左ニ叙述スル板垣伯カ世運ノ上進ニ随ヒ、自由党ヲ伊藤公ニ委託シタル主眼ニ鑑ミルモ、復タ全ク憂國ノ精神ニ外ナラス、是レハ土佐拳兵ノ事ニハ毫モ閑繫ナキモ、伯カ我憲政ノ為メ身ヲ退キタル公正率直ナル真摯ノ意志ヲ諒察セシハアルヘカラサルナリ、是ヲ以テ予ハ爰ニ伯ヨリ親シク聴取シタル梗概ヲ附載シ、世人ノ参考ニ供セントス、特ニ伯カ臨終ノ際迄国民ヘ遺著トシテ、編述セラレタル「立国ノ大本」ニ就クモ、益々憂國ノ至情已マサル所ヲ識察スルニ余リアリト謂フヘキナリ、今其深慮ノ存在セシ政党禅讓ノ意志ナルモノヲ左ニ記スヘシ、

第二十 板垣氏カ自由党ヲ伊藤氏ニ讓リタル

主眼

一往年米人某氏板垣氏ニ対シ日本帝国ノ国体ト、北米合衆國ノ国体ハ世界万国ニ比類スヘキモノナキ特殊ノ建国制ニシテ終古絶對ニ易ハルヘキ事ナキモノナリ、奈何トナラハ、今仮リニ日本國ヲ共和国トセントスルモ、米國ヲ帝国トセントスルモ、二者トモ実行スヘカラサルモノニテ、是レハ乃チ兩國ノ国家組織上社会ノ活理

ヲ司トル上ニ於テ、到底不可能ノ事ニ屬スレハナリト云ヒシ事アリ、伯ハ一米人ノ言ヲ至言ナリト称セラレタリ、而シテ板垣氏ハ我建國ノ久シキ国体ニ対シ、將來憲政上ノ制度ニ就キ、深く考慮ノ結果、先年自由党ヲ伊藤氏ニ継承セシメタル時ノ意志タル最モ深慮ノ存在スルモノアリ、當時予ハ伯ニ接シ親ク其事情ヲ聴取シタルニ、實ニ思慮ノ高大ナルニ驚歎セスンハアルヘカラス、今乃チ板垣氏カ伊藤氏ト妥協シタル時ノ心事ハ、當時天下ニ公ニセラレタル哉否予ハ之ヲ知ラサルモ、伯ヨリ聴取シタル概旨ハ凡ソ左ニ叙述スル所ノ如シ、

板垣氏ハ日本帝國ハ世界万国ニ冠絶シタル国体ナル所以ヲ以テ、万世渝ルコト莫ク 皇室ヲ尊崇シ、我國家ヲ無上ノ立君定律國ト爲シ 天祖肇造ノ邦家ヲ泰山ノ安キニ置ク可キハ、後世幾世紀ヲ経ルモ我國民ノ責任且ツ大義ト爲サ、ルヘカラサルナリト、元來伯カ居常尊皇ノ熱誠ナル事亦天下周知ノコトナリトス、是故ニ万国対峙上益々 皇室ノ尊榮ヲ増シ、國民ノ智識ヲ啓キ、其權義ヲ擴張シ、歐米人ガ日本帝國ノ立憲制度ノ建設ヲ危フミ、之ヲ失敗ニ畢ハラント冷笑シタル詭

謗ヲ痛ク憤激シハマサルヨリ、之ヲ反証歎服セシムルニハ、第一 皇室ノ御信任厚キト我國民ノ間ニ德望アル者ヲ薦メ、責任内閣ノ実ヲ挙クヘキ政黨内閣ノ模範ヲ創設準備スルヲ以テ一大緊切ナリト思惟セシナリ、元來自分ハ政治家ニアラス、國家憲政創草ノ前後ニ方リテハ、所謂尺ヲ枉ケ尋ヲ伸ハスノ目的ヲ以テ、國政ノ大改良ヲ率唱シ、以テ黨員ヲ督勵シ、激越ノ奔走ヲ爲シタル事アルモ、最早天下ノ大勢ハ定マリ、一日モ速カニ真成ナル憲政ノ事實ヲ海外ニ表現シ、政局ノ轉換ヲ爲シ、且ツ世界ニ恥チサル憲政ヲ施サ、レハ、國家ノ榮辱ニ関スル事至大ナリトス、苟クモ斯事ヲ爲サントセハ、先ツ伊藤ノ如キ平生 皇室ノ御信任厚ク、臣民ノ間ニモ声望ヲ有スルノミナラス、現時尤モ海外ノ事情ニ通シタル政治家ノ資格ヲ具有セル全氏ヲ推薦シ、自分カ今日迄百難ヲ排シテ統率セル自由党ヲ氏ニ譲リ、將ツテ自由党ノ主義目的ヲシテ、之ヲ実行セシムルニハ伊藤ヲ以テ其首領タラシムルカ前途却テ皇室ノ為メ、復タ國家ノ為メ、幸福之ニ過キササルヘシト思ヒシヨリ、這見地ヲ以テ其意志ヲ伊藤ニ致サハ、幸ニシテ彼レモ頗ル贊成ヲ表シ、邦家ノ大勢ヲ達觀シ國

運ノ上進ニ随ヒ、場合ニ依リテハ政党ノ首領ト為リ、
 帝國ノ為メ報効セントノ意衷ヲ竊カニ 皇上ニ内奏シ
 タリトノ秋ナリセハ、伊藤カ今新タニ政党ヲ組織スル
 ノ勞ヲ取ラス、我自由党ノ多年勢力ヲ扶植シ、益々旺
 盛ニ趨キタル、既成ノ大政党ヲ繼承セハ、彼我ノ便宜
 且ツ心事モ徹底ノ末ニテアリシカバ、何等ノ支障モ莫
 カリシヨリ、斯ク円満ニ政党繼承ノ一挙ハ双方談笑ノ
 間ニ実現シタル所以ナリトス云云、

如斯国家ニ対スル政見ニ付、互ニ胸襟ヲ開キ、其抱負
 ヲ交換シ、小異ヲ捨テ大同ヲ取り、憲政ノ完成ヲ期セ
 ントシタル意図疏通ノ上、忽條チ旬日ノ内ニ解決シタ
 ルハ、有繋ニ両雄カ機ヲ見ル敏ナルト、其胸中光風霽
 月相俱ニ一意 皇室ノ為メ、亦タ国家ノ為メニ之ヲ思
 ヒ、之ヲ憂ヘタルノ結果ニ外ナラスシテ、真ニ古武士
 ノ典型トモ称スヘキモノニシテ、後世永ク史上ニ其光
 輝ヲ放ツヘキモノト謂フヘキナリ、是レ先年伯カ予ニ
 対シ政党禪讓ノ事情ニ関セル答ノ要略ナリトス、豈ニ
 感激セサルヲ得ン哉、

又板垣氏ノ往年洋行中、佛国ニ於テ有名ノ政治学者「
 アコラス」氏カ板垣氏ニ対シ、閣下今次遠ク佛国ニ來

ラレ、親シク当国ノ学者・政治家トノ往復頻繁ナリシ
 由ヲ以テ、弊國ノ政治・政体ノ變遷沿革ヨリ今日ニ至
 ル諸情況ヲ研究セラレタルナラン、如何ニ佛國ノ現状
 ヲ觀察セラレタル乎トノ質問ニ対シ、板垣氏ハ佛國今
 日ノ進歩ハ野蠻ノ元氣ヲ以テ、自由ヲ率ヒタルモノナ
 ラント答フレハ、「アコラス」氏モ膝ヲ打チ、実ニ明
 言ナリ、閣下ノ看察ニハ一言ナシト云ヒテ、痛ク板垣
 氏ノ言ヲ感シ、翌日ノ諸新聞ニ掲載シ、激称シタリト
 云フ、故ニ板垣氏ハ予輩ニ対シテ曰ク、日本帝國ノ立
 憲政体ハ、我國ニハ古來武士道ナルモノアリ、此氣節
 ト此元氣ヲ以テ議院政治ニ莅マハ、我々ハ今ヨリナニ
 ヲ為シ、英國ノ憲政ヲ凌駕スル事何ノ難キ事アラン哉
 トノ言ヲ以テ、屢次予輩ヲ激励セラレタリ、伯ノ意見
 ヤ寔トニ志士ノ深ク服膺スヘキモノト感スヘキモノニ
 テ、現時ノ政党政派ノ諸士ハ、特ニ猛省セスンハアル
 可ラサルモノナリ、

本項ハ既述ノ如ク土左拳兵ノ真相ニハ毫モ關係ナキ
 モ、板垣伯ノ邦家ニ対シ、一点私心ナク 尊皇愛國
 ノ至誠ヲ以テ、朝野ノ間ニ尽瘁淬励シタル偉業ノ如
 キハ、素ヨリ枚挙スヘカラサルモ、多年死生ノ間ニ

立ち、終始天下ニ先タチ身ヲ効シタル、其内ニ就キ幾多ノ歲月ト艱難苦楚ヲ嘗メ、結晶シタル大政党、即チ自由党ノ首領ヲ一朝時勢ノ推移ニ伴ヒ、自個ハ政治家ニアラスト称シ、謙讓勇退シ、朝野ニ漸ク声望隆盛トナリシ伊藤公ヲ推シ、其政党ヲ統率セシメ、前赴ヲ委托シタル心事ノ公正且ツ高潔ニシテ、其至大ナル宏量ハ世界孰レノ邦土ニ就クモ、之ニ比儔スヘキ偉人アラン哉、輓近我國偉人ノ日ニ月ニ凋落シ、國家ノ重キヲ以テ之ニ任スル者甚タ寡ナク、國運ハ益々上進スル旁ハラ、邦家重要ノ諸問題ハ、弥々増大スル今日ト為リ、予ハ軫々感慨無量タリ、今乃チ板垣伯ガ憲政ノ為メ、伊藤公ニ政党後継ノ委托ニ繋ハル本項ノ事ヲ記スルニ際シ、坐ロニ感慨追慕ノ情ニ勝ヘサルナリ、爰ニ之ヲ附記シ置ケリ、読者諒之焉、

兩伯ノ人格ヲ信シタル上ノ事タルヘキト考フルヲ以テ、乍序併記セリ、而シテ其意見ノ梗概ハ之ヲ遠慮シテ録載スルヲ憚レリ、

護郷兵設置ノ趣意書概要

夫レ國ニ兵乱アルヤ、政府ニ海陸軍ノ常備アルヲ以テ、之ヲ鎮定ス、護國ノ設ケ何ヲ扶クル所アラシヤ、然而テ國ノ將サニ兵難アランスルヤ、我郷土ヲ護リ、我安全ヲ計ルハ則チ人民タル者、己レノ權利ヲ保持シ、以テ國ニ報スルハ当然ノ務メニシテ、復タ多言ヲ要セサルナリ、今ヤ西陲ノ乱アリ、肥・筑・豊・日地方ノ如キハ、人民山野ニ彷徨シ、其慘状実ニ見ルニ忍ヒサル者アリ、偶々官ノ保護スルハ則チ正稅若干ヲ消費スル者ナレハ、人民ノ其救護ヲ享クルモ誠ニ中心ニ屑シトセサルヘシ、若シ夫レ、其救護ヲ受ケ、以テ中心ニ満足スル者アラハ、之ヲ卑屈ナリト称スルモ亦タ誣ヒサルナリ、吾儕何ソ此轍ヲ踏ム者ナラン哉、故我郷土人民ト相謀リ、護郷ノ兵ヲ團結シ、以テ九州擾乱ノ勢、方サニ此土ニ波及スル事アラハ、戮力以テ此郷土ヲ守リ、我安全ヲ計ラント欲ス、亦タ止ムヲ得サルニ出ツル者ナリ、是以テ吾輩正ニ爰ニ用意スル処アラント欲スルナリ、

護郷兵団結ニ付小池県令宛ノ届書

此度九州ノ戦報御布達ノ趣拝見致候処、官軍勝利先以安心致候得共、勝敗ハ常ナラス、近時賊兵日向路ニ散乱致候趣、則チ我郷土ハ僅カニ海水ヲ隔テ候土地柄ニ付、如何ノ暴逆ヲ受クル程モ難計、就テハ則チ別紙趣意書ノ通りヲ以テ、護郷兵団結ノ出願致度、郷土一団ノ人民公議ノ上ナラテハ、順序等モ難相立ニ付、協議致度ト存候間、為念此段御届申候、何卒私共愛國ノ至情御洞察被成下、御聞置有之度候也、

然ルニ小池県令ハ護郷兵ノ組織ヲ以テ治安ニ害アリトシ、之ヲ許可セサリシナリ、

付録

廣瀬爲興書翰

爾啓、去月三十日付尊東本月四日到達、洗手薫誦益々御清恭御起居ノ旨奉拵舞候、僭鄙著ニ対シ早速御回報書被投、何共御手数數御意劣等奉掛恐懼此事ニ御座候、御紙上ニ依レハ西郷・江藤両氏ニ関スル記事、些少相違ノ旨右ニ付親シク御面話ノ上訂正ヲ為スヘキ欤、又ハ御書残シノ分ト御照合ノ上校正ヲ為スヘキ欤、或ハ小生御地へ罷越シ二三夜尊家へ御厄介ヲ掛ケ修正ヲ加フヘキ欤、右ニ付亦タ旅費云云ノ御紙面モ有之実ニ感涙ニ不堪候、而テ尊台ノ御上京ハ来ル八月末トノ御事ニ付、夫迄空シク時日ヲ費ヤスモ残念ノ義ト相考ヘ、目下御考慮中云云ノ御紙上別シテ感激ノ至ニ御座候、

就テハ不取敢相同度ト遠察仕候点ハ、西郷・江藤二氏ノ記事ニ対シ些少相違ノ点ハ其大綱即肝要ノ点ハ如何ノケ所ニ御座候哉、余マリ錯雜面倒ノ事ニモ無御座候ヘハ、其要点御垂示被賜候ヘハ直ニ訂正ノ上更ニ御覽閱ヲ煩ハシ申度候、一昨年高知ニテ御演舌ノ分モ充分御満足ニ不相成様ノ筆記出来居候欤ト遙察仕候、其他ニモ御考ノ事ト相違云云ノ御報示ハ高知ニテ御演舌ヲ筆記シタル分ニ

ハ無之、拙著ノ記事ヲ御指稱相成タル事カト奉存候、何分土佐拳兵計画ノ真相ハ将来ニ取り歴史ノ一端トモ相成リ、至極大切ノ事柄ト相考候ニ付、別シテ尊台ノ御指揮且ツ御訂正ヲ蒙リ一ト通り完全否ヤ事実ニ通キモノヲ出版仕度ト相考候間、何トカ此際簡便ノ方法ヲ取り申度ト相考候ノミナラス、出版ヲ希望シ来レル者モ其以来一ニ増加ノ事情ニ付、旁々以爰ニ重テ左記ノ如キ都合ニテ御往復仕度候、

一 西郷・江藤二氏ニ関スル記事相違ノ要点一ツ。書ヲ以御教示ヲ是レ第一ニ相伺候候、

二 其他ニモ相違ノ廉々御座候ヘハ是又第二ニ其要点ヲ(御カ)相示教相蒙度候、

三 土佐拳兵ノ計画ハ実ニ尊台ノ御主謀且ツ大坂城奪略ノ御壯図ノ如キハ、今回拙著ヲ一閱シタル者モ始メテ之ヲ知り得タル者勝チニテ非常ニ愉快ト賛稱シ、拙著ヲ歎呼致居候、

四 御入獄中板・後西氏ノ洋行ニ対シ、御亡兄岩村様ノ御訪問ヨリ該件官府ノ秘密ヲ帯ヒラレ、御面会ノ義ハ公然之ヲ記スルヲ憚カリ、拙著ノ如ク之ヲ記シタルモ其際御亡兄様ハ検査院長ナリシカ、司法大輔ナリシカ、

大江氏ハ検査院ナラント云ヘリ、孰レカ其御事実ナル哉御記憶(御)ノ処御示ヲ願上候、

五 拙著記事ノ外此際加筆スヘキ分ニシテ、世人ノ耳目ニ新タナル廉々ハ何卒一ト書中ニ御加ヘヨ以御垂教奉希上候、

六 去月廿一日呈書以来、汲古堂外一社ヨリモ出版ノ希望有之、来ル十日后面会ノ筈ニ御座候処、右ハ版權ヲ合セ、譲渡スヘキ哉、版權ハ依然小生ニ於テ之ヲ所有スヘキ欤考慮中ニ御座候、何分目下ノ境遇ニ付版權ヲ合セ譲渡スレハ其価格モ多少有利タル趣ニテ之レハ友人ヨリハ出版丈ケヲ委任セヨトノ説多数ニ御座候、出版ハ五千部ヨリ壹万部ハ是非共摺リ出シ度ト希望社側ヨリ申出候、

七 立志社ノ建言(活版)并ニ黒田内閣ニ御提出ノ御建白書ノ御写シ杯ハ御手許ニハ無御座候哉、先年西南ノ紀(配)伝川崎三郎編述ノ際、小生ヨリ借与シタルモ今返却シ来ラス、到底紛失ノ事ト相考ヘ昨今督促中ナルモ愈々紛失ニ決スレハ拙著ニ転載スル事不相整、甚タ残念ニ付旁々御手許ニ御所蔵ナラバ、暫時拝借仕度相考候、

八 出版モ小生ノ手ニテ其費用ヲ支払ヘハ、甚タ面白キ

様相考候得共不取致二百五十円、三百円内外ヲ要スル趣ニ付、是レニハ閉口罷在候、富山房坂本ニ対シ、此際何ニカ御良案ハ無之哉、又ハ神田小川町文會堂ノ主人立田等ニ(是レモ宿毛人)御考ヘハ無之モノニ哉、早速御礼御挨拶書差出可申筈ニ御座候処、昨今妻并孫女感冒中殊ニ頗ル狭キ間室ニ枕ヲ并ヘ平臥中、何角取紛殊更延引仕候段不惡御諒察被賜、所陳ノ片々御依頼且ツ御都合相伺度匆々如是御座候也、恐頓拝復、

二月八日

廣瀬爲興

林 有造様

估執

二伸、小生一昨年来奔走ノ事業モ漸ク不遠中、即チ当月中ニハ目鼻相付可申相考ヘ、日夜相樂居申候、一ハ彼ノ日原山大林ニテ宮内省ノ勅任技師長外二三名ノ技師ヲ伴ヒ、十日内外ノ日數ヲ費ヤシ二千三百円ノ費金ヲ投シ、綿密ノ踏査ヲ為シタル結果、其価格四百八十三万余円ト云フ報告ニテ大ニ意ヲ強フシ、御料林又ハ官林ト交換ノ事実、実現モ容易ナル雲行ト相成申候、其外一件ハ日光ニ「ホテル」建設ノ計画ニテ該地ノ地所壹万三千坪余リ、小生杯ノ事業ニ貸与援助ヲ望ケ、

來ル十五日迄ニハ十五万円ノ金融ヲ受ケル義、中国某侯爵家トノ取引ヲ為ス確約ヲ為シ申候ニ付、孰レ右日光ノ地所ナリ、日原山林ナリ、(越后石油王某ヨリ六拾万円金融ト、又ハ勢州ノ某資産山林家トノ間ニ交渉良好ト為リ、此二人ノ内孰レカ早キ方ニ取極ムル筈ニ御座候)委細ハ後便ニ可申上候、小生モ本年夏迄ニハ多少恢復ノ基礎開カルヘキ様愚考仕候、匆々、

春寒難退御座候処、高堂愈々御清祥可被成御揃奉抔舞候、相隨テ小家無異、幸ニ御休意被賜度候、借其后ハ甚タ御無音ニ打過、恐懼此事ニ御座候、御海容奉仰上候、然ハ鄙著ノ件ニ付、去月八日付愚札差上候ニ付、疾ク御披見ノ上、申出ノ事情御了知被賜候ト奉遠察候、然ニ尔來今日迄一ヶ月余ヲ經過仕候事ニ付、爰ニ不顧欠礼御伺申上度点ハ、目下拙著御覽ノ上彼ノ西郷ト江藤両氏ニ關スル当年ノ御実況詳細御記載中ニテモ御座候哉、又ハ其他拙著ノ誤記若クハ尊慮ニ適セザル廉々夫々御訂正被賜居候哉、御都合御伺申上度次第ニ御座候、或ハ去月八日付差上タル愚札未着ニテモ御座候故ト遙察仕候、若シモ果シテ御手許ニ到達不致程モ難計ト卑考仕候ニ付、為念去二月

八日付差出シタル愚札ノ大意左ニ相認メ、御参考旁々御
依頼申上ケル次第第二御座候、

去ル一月三十日ノ尊書中、西郷・江藤トノ談話ハ些少
違候処有之、一昨年高知ニ於テ話候事モ有之、不面白
且ツ他ニモ御考ヘト違候事有之云云御申越ニ付、去月
八日付ヲ以、西郷・江藤トノ御談話上相違ノ要^点並ニ
其外相違ノケ所モ御座候ヘハ、何卒^卒御手数教其廉々一
書ヲ以テ御示教相蒙度、左スルトキハ該御示教即チ一
ツ書ニ依リ訂正ヲ加ヘ、更ニ尊台ノ御覽閱ヲ煩ハシ可
申云云御依頼申上タル次第第二御座候、実ハ出版ヲ迫ラ
レ候ケ所モ少カラス、且ツ小生今日ノ境遇トシテ一日
モ早ク出版ヲ為シ、多少ノ金融ヲ得ハ孫女カ来四月ヨ
リ高等女学校ニ入学スル都合ニモ便宜ノ内情モ御座候
次第第二御座候間、幸右等ノ情状御洞察被賜、拙著上訂
正補修ヲ加フヘキケ所ハ可成早々御示教相蒙度次第第二
外ナラス候、

將又愈々出版ノ場合ハ尊台ノ御題字ナリ、又ハ拙著ニ
対スル御思召即チ御感想・御意見書御認メ御送付被賜
候ヘハ誠ニ一段ノ面目幸福此事ニ御座候、去一月廿一
日^原元稿御送付以来亦タ多少ノ補修ヲ加ヘタルケ所モ有

之、実ハ小生モ該拙著ニハ一心ノ熱血ヲ瀝キ、終世ノ
遺書トシ、且ツ尊台ヲ始メ板翁其旧同志者ノ為メ、史実
ノ一端ニ為サント欲シタル鄙著ニ付、小生ノ心意ハ決
シテ閑々虚作ニハ無之積リヲ以書キ上ケタル事ニ付、
此辺ノ事情ハ幸ニ御諒察ノ上何卒当年ノ事情、所謂当
年生死ヲ俱ニシタル秘蹟トシタル処ノ価値モ可有之哉
否ノ点等幸ニ御評斷モ相願度奉存候、

式実ハ尊慮ノ如ク親シク拜眉ノ上御書洩ノ御扣ヘ書、若
クハ種々ノ御旧談ヲ拜シ、而シテ出版仕度トハ相考候
得共、御上京ハ来ル八月下旬ノ御事柄ニモ有之、亦タ
小生ノ御地ニ罷越候義モ目下ノ境遇上相整不申ニ付、
不得止尊慮ノ廉々一書若クハ御付箋ヲ以其要^点御示教
相蒙候ヘハ出版モ自然整ヒ易ク相成ル事ト卑考仕リ、
今回モ重テ一書又ハ御付箋ヲ以テ御示教ヲ願出ツル次
第二御座候、去月八日付願出ノ如ク御在獄中御亡兄様・
板翁等ノ洋行ノ件ニ付御談合ノ砌ハ御亡兄様御在職ハ
司法大輔、会計検査院長ナルカ、此両途ノ事実御示シヨ
願ヒ、且ツ黒田伯内閣組織中、御差出御建白ノ御扣ヘ
ハ無之哉御伺申上候、川崎三郎^(西園記伝ヲ書キタル者、今ハ國民新聞記者)ヨ
リ今ニ返戻シ来ラス、多分紛失シタルナラント相考ヘ

目下追求中ニ御座候、

先ハ御近状相伺度、旁々叙上ノ御依頼御相談迄草々、
例ノ捧乱臺候、

誠恐拜

三月十五日

廣瀬爲興

林 有造様

佶 執

去ル大正八年七月十六日板垣伯爵薨去セラレ、親戚故旧
及ヒ老伯ヲ景慕スル処ノ人士等棺前通夜スルニ方リ、伯
爵生前ノ偉勲逸話ニ涉ルヤ、彼ノ明治十年西南戦役ニ際
シ、土佐ノ方向ニ就キ天下ノ疑問タルモノアリ、這ハ当
年ノ真相ヲ詳ニセサルヨリ世ノ惑ヲ釈ク能ハサルモ、亦
タ怪シムニ足ラサルナリ、然ルニ老伯ノ薨去セラレタル
以上ハ寧ロ当年ノ真相事実ヲ明カニスルニ如クハ莫シト
林・大江二氏等ノ発言ニ依リ、当時ノ真況ヲ記スル事ト
為シタルモ、十年役後今日ニ至ル業已ニ四拾五六年ヲ經
過シタル歲月ノ久シキ、其事ニ干繫シタル者多クハ故人
ト為リ、今其事ニ参予シタル族ニテ、目下在京スル者ハ
殆ント筆者ノ外ナシ、亦タ林・大江二氏モ夙トニ其事ニ

与カルト雖トモ林氏ハ当時専ハラ東京・大坂・高知ノ間
ニ奔走セル或ル事情アリ、又タ大江氏ハ主トシテ京坂ノ
間ニ往来シタルモノニテ挙兵ノ順序・方向等ノ機密ニ参
画シタル者ハ、今ハ全ク筆者一人ノ外ナキ事実ト為リシ
ヨリ、林・大江両氏等ハ只管筆者ニ対シ当時ノ実況ヲ叙
述スル事ヲ憊憑シ己マサルヨリ、当年ノ事蹟実歴並ニ之
ニ切要ノモノト感スル断片的ノ事件ヲ煩ヲ厭ハス、記憶
伝聞ノ細大ヲ録シ編述シタルナリ、但シ本書脱稿ノ上出
版費ノ如キハ当初林・大江・竹内三氏ノ間ニ負担ノ約ア
リシモ（林氏ハ）郷里新田大洪水復旧費ニ八万円ヲ、大
江氏ハ数月大患ノ為メ其病費壹万ニ垂ントシタル事情ア
リシ后、不幸三氏共咸ク泉路ノ客ト為リシヨリ、之レカ
為メニ出版遷延ニ及ヒシモ、元來海南男兒一旦死ヲ決シ
國家ノ為メ希図シタル事蹟ヲシテ空シク此儘ニ為スモ甚
タ遺憾ニ耐ヘサルヲ以テ、何トカ爰ニ出版費ヲ調ヘ、十年
挙兵計画ノ秘蹟ヲ天下ニ公ニ為サント欲シ、種々苦心ノ
結果近日或ル事業ノ為メ多少ノ費金ヲ得ル望ミアルモ、
出版費全部ノ支弁ハ何分困難ヲ感スル事情有之ヨリ、不
得止故板垣老伯ヤ後藤老伯并ニ林・片岡・大江氏等ノ諸
氏ト生前交際ヲ厚フセラレタル諸公諸彦ニ懇ヘ出版費ノ

補助ヲ仰キ、十年西南ノ戰役ニ對セル土佐派ノ真相ヲ天
下ヘ判知セシメ度モノト相考ヘ、爰ニ叙陳ノ事情ヲ記シ
多少ノ御補助被成下候ヘハ幸甚ノ至ニ耐ヘサルナリ、

謹白

大正拾一年十一月

廣瀬爲興^印

追テ書題ハ左ノ如ク仮名セリ、

明治十年
西南亂役土佐拳兵計畫之秘蹟

ト為シアルモ變更スル等ハ諸彦ノ御賢慮ニ御任カセ申

上候事、

鹿児島県史料編さん関係者

顧問

聖心大学 大久保利謙
女子大学 講師

前早稲田大学教授 竹内理三

前学習院大学学長 兒玉幸多

東洋大学教授 沼田次郎

前東京大学教授 小西四郎

東京大学教授 菊地勇次郎

委員

鹿児島女子短期大学 講師 北川鐵三

全 教授 村野守次

前鹿児島大学教授 桃園惠眞

鹿児島大学教授 原口虎雄

全 教授 四本健光

全 教授 五味克夫

全 教授 桑波田興

鹿児島県立短期大学 教授 芳即正

元宮之城町教育長 山下千本

元鹿児島県維新史料編さん所編集課長 田島秀隆

所長

総務課

中間亨

國分友清

本田親宣

中間茂弘

平野誠一

川島重春

萩原佳代子

下堂園純治

宮下滿郎

晋哲哉

古賀秋好

堂滿幸子

久留涼子

川崎和子

平山祐子

牧迫絹江

吉村眞利子
今釜和代

編集課

鹿 児 島 県 史 料

西南戦争 第3巻

昭和54年12月20日 印刷

非売品

昭和55年1月21日 発行

編 集 鹿 児 島 県 維 新 史 料 編 さん 所

発 行 鹿 児 島 県

印 刷 所 合 名 会 社 文 尚 堂 印 刷

鹿 児 島 市 西 千 石 町 1-8

電 話 (0992)-22-1643
23-7723
